
乾坤一擲探求者（クエスター）[赤信号！ 皆で渡れば.....やっぱ怖い！]改

群青 坊哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乾坤一擲探求者クエスター「赤信号！ 皆で渡れば……やっぱ怖い！」改

【Nコード】

N0755N

【作者名】

群青 坊哉

【あらすじ】

長編小説「乾坤一擲冒険者」の短編集です。

パロディ、ギャグ、一人称……と、何でもアリ！な世界に解放された乾クエキヤラたちが大暴れしちやいます。

0 乾クエキヤラによる前書き(前書き)

> i 1 0 4 0 1 | 1 0 5 2 <

0・乾クエキャラによる前書き

リタル 「……ん？ あれ？」

トラン 「なあんか……、いつもと違うような……」

グレープ 「みなさん、どうかされましたか？」

クレープ 『トランちゃんああん！ いやーん、今日も可愛くてクレープ、思わず絞め殺したくなっちゃう！』

トラン 「うわ！ だからそう出会い頭に抱きつくなクレー………
…死ぬ、マジで死ぬっでは……っ」

グレープ 「うわあ。トランさんのお顔が赤黄色青です」

リタル 「おばかドモは放っておいて……ね。なんかおかしくない？」

グレープ 「？ なにがですか？」

リタル 「タイトルよ。たいとる。確かあたしたちが出張ってる話
って……」

グレープ 「えっと……『健康一時 冒読者』でしたっけ？」

クレープ 『違うわよ。「ケンチン一滴 栄養失調」デシヨ』

リタル 「違あう！！ 『乾坤一擲 冒険者』よ！ 略して乾クエ

！！ 確かに長たらくて覚えづらい事は確かだけど間違えるにも程があるでしょーが！ 大体クレープのはもはや原型留めてないじゃないの！ ったくもおおー！」

トラン 「まあまあ。でも言われてみれば確かに。違うよな……うん。把握できて少しスッキリしたぜ」

グレープ 「んー、どちらもルビは『クエスター』のようですけど……」

リチウム 「……ふっふっふ。ゝなあーっはっはっはっはっはっはっはー！」

リタル 「どーせ作者が間違えたんじゃないの？ それでなくても誤字脱字多いんだから…… 生みの親がそんなにこっちは恥ずかしいったらありやしないわよーったく。母国語くらい普通に操れないもんなのかしら……」

トラン 「確かに。『作者が間違えた』っていう説は異様に説得力がある……」

クレープ 『ってか。そもそもアイツに「普通」を求める事自体が間違いヨ。チビガキ』

グレープ 「作者さんは、少し自重すべきだと思いますー」

リチウム 「……って、こらー！！ おまえら、俺様を無理やり無視するなー！！」

リタル 「あ。居たのリチウム」

クレープ『主役のクセに容姿だけが際立って……影薄いから。アンタ』

リチウム「ぐすん。俺様、主役なのに……」

グレープ「そ、そんな事ないですよっ リチウムさんだって毎回一生懸命頑張ってるの、わたし見てます！ ただ、それが周りのみなさんよりほんの少し存在感が空気なだけで……っ ……ほら、見てください！ 蟻さんだってちゃんとしっかり生きてるんですから、リチウムさんも……っ」

トラン「いや、グレープちゃん……それフオローになってないから。なんか、むしろ崖の上から突き落とした拳句、屍目掛けて槍を何本も落としまくってるようなもんだから。……ほら」

リチウム「……………。（体育座り／昭和枯れススキ）」

グレープ「……あれ？」

リチウム「くっくっそー！ 全員で束になって俺様をおちよくりやがって！ 誰がなんと言おうと主役は俺様だ！ 証拠に、おまえらが疑問に思っているタイトルの謎だって、俺様はちゃんとして知ってるだぞ！」

リタル「なによ。作者が間違えたんじゃないっていうの？」

リチウム「うむ。なんでも、コレは『外伝的な何か』らしい」

トラン「……って、なんだか切なくなる位に曖昧だな……」

リチウム「知るか！ 俺様は聞いたままに伝えたまでだ！」

リタル「……はーん。つまり作者の奴、ここにきて無謀にも『本編』とはまた別進行で『外伝的な何か』ってのも始めたって訳だ。本編は……今は確か、ようやく真ん中辺り 折り返し地点に至ったってとこまで進んでるのか。……作者がシリアスに厭きる頃ね。まあ、だから本編を『冒険者』で、外伝的な何かを『探求者』って、タイトルで区別したってな訳ね。納得」

トラン「……たく、いい加減というか、安直というか……」

グレープ「でも……とても解りづらいです」

クレープ「ホントよ。ただでさえ長たらくて覚えにくいってのに、大体、読み方は一緒なんデショ？ 字なんてイチイチ覚えてらんないわよ」

リチウム「俺様は別になんでもいいぞ。これで奴の鈍足ペースが上がるつつうんならな」

トラン「出番が欲しくて……切実なんだな……リチウム。……うぶぶ」

リチウム「笑いを堪えて言うな童顔男！ とう！（跳び蹴り）」

トラン「ぐは！ ーいきなり何す……！」

クレープ「ーちょっとおお！ トランちゃんに何かましてくれてンのよアンタ！（目にも止まらぬ百烈蹴り）」

リチウム「ぐええ……」

リタル「……おばか」

グレープ「そういえば、本編前半でリチウムさんを出張らせてしま
うと話が終わってしまうって、作者さんが嘆いているのを耳にした
事があります。リチウムさんの『死球』は乾クエ世界では最強過ぎ
て、下手をすれば出てきて数秒で魔族さんを倒してしまつて<完>。
なんて事になりかねないって。出したくても出せなかったみたいで
す」

リチウム「（復活）ほう。俺様の影が薄いのは、俺様が強すぎるか
ら、か……。ま、そういう理由ならば納得できよう！ ふ……っ」

トラン「復活早っ」

リタル「そんなの言い訳に過ぎないわ。単に作者の話の作り方が
なっていないだけでしょう」

リチウム「ぬ」

クレープ『ソレコソどうだっていいわヨ。代わりにトランちゃんが
主役級に目立ってるんだから。おかげで乾クエはまだマシな小説に
なってるってなモンよ』

リチウム「主役を差し置いて出張るとは……おによれトランちゃん
許すまじ！ この俺様が直々に靴に画鋐を仕込んでやる！ それ（
ぱらぱらぱら……）」

トラン 「逆恨みの拳句めめっちい罷仕掛けようとすんな!! (殴)

グレープ 「あはは。これからは毎日のお食事も毒味必須ですね、トランさん」

トラン 「って、満面の笑顔で言われても…… (涙)」

リタル 「つくづく報われない奴……。hpであたしたちのキャラデザを担当してくれた人も地味過ぎ! ……とかで、とにかく好かれちゃいないみたいだしね…… あんた」

トラン 「えええ!? マジかそれは!」

リタル 「単細胞のあんた相手に嘔吐いたって楽しくないわよ」

クレープ 『安心してトランちゃん! 影薄主人公だろーが小生意気キャラデザだろーがアタシのトランちゃんに害なすフトドキな輩はミナナまとめてこのアタシがやつつけたげる! 土下座して猛省は勿論、謝罪の言葉を百書かせて千言わせて、これからは二度とトランちゃんに足を向けて眠れなくなる様ありとあらゆる手をつかって徹底的に痛めつけてやるワ! 手始めに…… (冷やかな目でリチウムを睨みつつ、すちゃっとバリカン構え)』

リチウム 「……………ま、まあ冗談はさておき、だな……………」

トラン 「さっき完全に目がマジだっただろうが…… おまえ」

リチウム 「『外伝的な何か』は短編集だと聞く! なんでもパロディやらギャグやら各キャラの一人称話やら…… 本編では出来ない事

がてんこ盛りらしい」

リタル 「……本編以上にすちゃらか小説になるのが目に見えて開幕前から恐ろしいわね……（青ざめ）　　ゝて、何？　もう始まつちやってるの！？」

リチウム 「おうよ！　俺様達の会話がまんま前書きになるらしいかな」

リタル 「会話が？！　こんなの小説でもなんでもないじゃない！
……………うはあ……………（呆）」

リチウム 「始まればなんでもいいんだよ！　んでは。本編とは一味違った『乾クエ』世界と、この俺様の勇姿を！」

クレープ 「可憐でセクシーなアタシの魅力を！」

リタル 「ゝああ、えつと！　かわいいリタルちゃんと、素ン晴らしい発明品チャン達の活躍を！」

トラン 「俺の血と汗と努力の（片想いの）結晶を！」

リチウム 「せいぜい楽しめゝ！」

グレープ 「どうか、お楽しみくださいっ　ですゝ（手振り）」

1・美少女仕置き人 CC団参上！

1

「…………おかしい」

西日が姿を消した頃。

煌々と点いたシャンデリアの下、共同部屋である1号室のリビングに現れたのは、黄緑色の髪を二つに分けて結い上げたエメラルドの瞳の少女 リタルだった。

ついこのあいだ十一歳になったばかり。クラスで背の低い順に並べば万年最前列。本人甚く気にしており、ちよっとおちよくるつもりで口にすれば地獄を見る。

『……………なにがヨ』

リタルの眩きを受けて、上から降って来た声の主は、不機嫌全開の表情で宙を漂っていた。

半透明の肢体。白肌を惜しむことなく露出させる開放感のある服装を好み、今日も今日とて薄い腹が露になっている。長い金髪を一つに結い上げた美女 クレープだ。

「いやだから…………最近変なのよね」

対する返答に、クレープの漂流がピタリと止まる。

「ヘン…………ですか？」

夕飯の支度が一通り終わったのか、食欲のそそられる香りの漂う

キッチンから戻ってきたグレープがリビングに顔を出した。

肩までの蒼い髪を後ろで一つに纏めた、クレープそっくりの美女だ。細面に灯るルビーを思わせる赤い瞳が不思議そうにリタルの小さな背中を見ている。

『へえ……奇遇ねチビガキ。アタシも今同じ事考えてたトコよ』
「クレープさんも？」

グレープはリビングの中央　リタルが今腰かけているソファの近くまでトコトコ歩みを進めると、宙に寝転がっているクレープの引き攣り顔を、やっぱりキョトンとした表情で見上げる。

「クレープ。悪いけど今度ばかりは多分、こっちの方が由々しき自体だと思う」

『何よ、チビガキ。試しに言ってみ？』

「……………折角人がスルーしてあげればさっきから……………チビガキ言うな！」

「お、落ち着いてくださいリタルさん……………それで？　一体何がヘンなんですか？」

「……………リチウムが、ヘンなのよ」

「リチウムさんが？」

「ええそう。ココ最近……………そうね。十日位前から……………かしら。仕事に取り組む態度というか、対する姿勢つてのがおかしい」

ソファの背に凭れ掛かり腕組みをして、リタルが中空を睨む。

ちなみに仕事と言うのは、彼女とリチウムがコンビを組んで営んでいるストーンハント業　毎夜金持ちコレクターが所持している『禁術封石』をかつぱらうという盗賊稼業の事を指している。

『アイツが不真面目なのはいつものコトじゃない』

「いつも以上……ってか、異常なまでに、よ」

「異常、ですか？」

「そうよ。いつもは仕事の時間が近づけば、奴は必ず家で待機してたの。それが、ここ十日前から急に……」

「お家にいらっしやられないんですか？」

「ってか。遅れた拳句、泥酔状態で現れるのよ」

リタルの一言にクレープは、グレープと同じ赤いルビー色の双眼をギラリと光らせる。

「お仕事前に飲酒……されるのですか？ お外で？ リチウムさんが？」

「そうよ。それもベロンベロンになるまでね。おかげで、奴が何か致命的なヘマ犯しやしないかって仕事の間中、常にヒヤヒヤしてんのよこっちは。普段の数十倍は神経すり減らしてんのよ。まったくもって迷惑な事この上ない」

「リチウムさんて……お好きでしたっけ？ お酒」

「さあ？ けどこんな事、コンビ組んでから今の今まで一度だっけなかったのに、どうしたってんだか……。問い詰めてもシラを切るし、あんまり詮索するのも嫌だし……おまけにドギツイ香水の匂いまでつけてきて。あれじゃあまるで……」

『あら〜。コレマタ奇遇ねーリタルちゃん』

急に猫撫で声を上げてリタルの隣に腰掛けるクレープ。

ちなみに、彼女の身体は半透明な為、物に触れる事が出来ない。見た目はリタルと同じソファに腰掛けているようで、その実、先程と同じく宙に浮いているだけなのだ。

「……な、なによいきなり。気持ち悪い」

露骨に顔をしかめるリタル。が……、

『実は、アタシのトランちゃんも、そうなのよ』

特に気分を害した様子もなく、正面を向いたまま口を開いたクレ
ープの一言に、リタルの表情が一変する。

「……………なんですって？」

「トランさんも、お仕事前に飲酒……………ですか？」
『そうじゃない』

幾許かの沈黙の後、クレープは横目でリタルを見遣る。

『深夜よ』

「深夜？」

『トランちゃん。このところ毎晩家に居ないのよ。フラリと出て行
つては、フラリと戻ってくる。「遅くなる」って電話の後で、スー
ツ姿のまま日付変わるまで家に帰って来ない時もあった。

街中探^{トコ}しに飛んでも見当たらないわ、やっと帰ってきたーって思
えば泥酔状態。コッチが何聞いてもはぐらかされちゃうのよねー。
下品な匂いもプンプンさせてンし……………イヤでもマサカ。真面目なト
ランちゃんに限ってソナコトはあるわけないわよねーとか思っ
てもサスガに十日以上続くと、なんだか……………面白くないわよねエ…

……………

「……………えっと、それって……………もしかして……………」

「リチュムは仕事前、なんデシヨ？ 多分トランちゃんも一緒に行
動してるッポイわ……………どうやら時間帯が一致してるようだモノ』

クレープの低音にリタルの形相が凄みを増す。

「って事は何?! あいつら夜な夜などこそその下品な女がやってる店で飲んだくれてるって訳?

……そりゃ、リチウムがドコで何しようと思手だけど……でも自分達だけお酒飲むなんてズルイ!」

「えっと……一応未成年ですから……リタルさん……」

グレープの控えめなツツコミにギョロリと鬼の視線を向けるリタル。

「なんか言った!?!」

「い、いえ! なんでも……っ」

十一歳の少女が背後に浮かび上がらせた邪悪な悪魔の影に吃驚して肩を跳ね上がらせたグレープ。

と、拍子にその手からボトボトと何かが零れ落ちる。

「? なによこれ……」

拾い上げようとその場にしゃがんだりタルが、びしつと音を立てて石化した。

『どつたの?』

覗き込んだグレープも、同様に固まる。

グレープが落としたのは大小様々、色取り取りのライター数本だった。

彼女達を固まらせたのは、無論、ライター本体ではない。

問題は、その表面に印字された文字なのである。

『パフパフ王国』、『ムチムチ宮殿』、『SMガール』、エトセトラ……

「……グレープ？」

「はい？」

『……念のため聞いとくケド。どしたの？ コレ』

「えっと……お洗濯物のポケットの中から出てきたものです。最近お顔を合わせる事が少なくて、預かったまま今の今まで返しそびれていまして。このままだと忘れてしまいそうなので、私室に置いておこうかと……」

空気を読まない（読めない）事に関しては天才的。グレープは実にのんびりした返答を口にした後「えへへ」というなんとも愛らしい笑顔を浮かべる。

真正面に位置する二人が浮かべる冷笑やドス黒いオーラにも、未だ気づいていない様子だ。

『……さらに念を押しとくケド。……誰の洗濯物から出てきたワケ？ ソレ』

「ええっと……」

小首を傾げて天井に視線を漂わせるグレープ。

「リチウムさんとトランさんの服だったと思います」

ビシ……！

リビング内に、まるで空気の悲鳴の如きラップ音が響いた。

「……あれ？」

妙な怪音にグレープが再び小首を傾げた。そのすぐ目の前の人物

と幽霊から漂う、凄まじい妖気が室内を徐々に支配してゆく。

「……そう。どーりで最近、なんかケバケバしい匂い付けてくるなあこいつ……とか思ってたんだけど……へえ、そう。そういう事だったの……」

『トランちゃんも、なかなかイイ度胸してンじゃない？ アタシという彼女が^{もの}ありながら。毎晩フラフラとイカガワシイお店に通い詰めてたって訳ね……くつくく。バレないとも思っていたのかしら……相変わらず可愛いトコあんだから』

「んっふっふ。それも、二人揃って、でしょう？ ……さて、あんなだけ仲の悪かった男どもが、一体いつの間に行動を共にする程仲睦まじくなっちゃったんだか……ねえ？ クレープ？」

『そうねエ……男の友情なんて妙なモノにでも目覚めたのカシラ。微笑ましいわネエ。』

ま、そんなだけ仲良くなったってンなら、無理に引き離すコトもないわね……最期まで二人仲良く、地獄に落ちてもらおうぢやない……。……ねエ？ リタル』

「あら。さつきから珍しく意見が合うじゃないクレープ。んっふっふ……」

『くつくく……』

「……あ、あの……お二人とも……？ えと、これはですねえ……」

ようやく漂う邪悪なオーラを感知したのか、冷笑を浮かべ合う女二人の様子をおずおずと伺うグレープ。

瞬間！ 二人の恐ろしい形相 剥き出しの二対の眼球が一斉にグレープを貫いた。

「ううあ！ ……はい！？」

『グレープ……！』

「奴等はどこ……！」

「えっと、確か……六時過ぎに、ご一緒にどこかへお出かけになられたようですが……」

『へエ……今日はランちゃんのお仕事がおヤスミだから、こんな早くから居座ろうつてな魂胆なのね……ゴ熱心なコトで……くつくつく……』

「……でも、まだ七時よ？　こんな早くっからやつてるイカガワシイお店なんてあるの？」

『そんなの知らないわヨ。二人で出掛けてったってのがイイ証拠じゃない。あんだけ仲の悪い二人が一緒に行動するコトなんてソウ滅多にあるモンじゃないデシヨ』

「それもそうか………あいつら！」

『追つてシトめるわよ！　リタル！　魔石レーダー！』

「らじゃ！」

「あ、あの……夕飯は取っておいた方がよいでしょーか……？」

「何言つてんのよ！　グレープも行くの！」

「わ、わたしもですか？」

『グズグズしない！』

「ゝああえええ……」

二匹の鬼に半ば引きずられる形でグレープは1号室を後にした。

2

「……ここか」

目的地の目の前　地下へと続く狭く暗い階段を前にしてリチュムは長い足を止めた。

仕事時に纏う漆赤のマントは置いてきたのか、代わりにジャケツトを羽織っており、見る者を魅了する切れ長の青い瞳は今はサングラスで隠れている。

大盗賊として世間に顔が知れ渡っている彼は普段からサングラスを着用して街を出歩いている。

日が入りすっかり暗くなつた外界の冷たい空気が、長い銀糸を撫で、攫う。

「……おい。リチウム」

その隣に、同じくサングラスをかけ意思の強そうな黒眼を隠したトランが立つた。

黒の短髪。リチウムには敵わずとも決して低くは無い背丈。こちらはいやに年季の入ったロングコートにシャツ、スーツの黒ズボン……と、仕事時とあまり変わらない井出達だ。

「なんだ、水をさすなよトランちゃん……って、なーんかおまえ。顔色悪くねえか？ 腹でも壊したか？」

「あのなあ……ガキか俺は。……つつつか、さっきからなんか悪寒がするんだよ……。あのさ。おまえの言う通り、こんな早い時間から来てみたけど……大丈夫なのかよ？」

「ダイジョブって、何が？」

「こんな早い時間に、女の子が揃ってるのかって話」

「安心しろ。この店は七時開店だ。それにこの手の店の若い女の子は大抵七時過ぎには出勤してきているものだ。俺様は確信している！」

「なんだその妙な力説……」

「っていうかなあ……最近じゃいよいよリタルがいぶかしんできたからなあ……奴等にバレると後が面倒だろが……」

「……まあな。考えるだけで恐ろしいよ……けどなんか……前々から思ってたんだけど。おまえって、異様に詳しいのな。こういう店」

トランがジト目で見上げると、その必要以上に整った横顔はふふ

んと笑んで見せた。

「俺様を誰だと思っているんだ？ 俺様は泣く子も黙る大盗賊、リチウム・フォル……………！」

「へいへい。それはもう聞き飽きたつての。さっさと入ろうぜ。…彼女が俺たちを待っている、かもしれない」

「って、おい、待てよトラン！」

トランを先頭に、二人は地下に降りる暗い階段を順番に下りてゆく

そんな男二人の背中を見下ろす二対の鬼の目があった。

「あゝいゝつゝらああああ……………！」

『本っ気でイカガワシイ店に通っていたとは…………トランちゃん…………』

「あんなに純粹だったのに、リチウムなんかの影響受けちゃってカワイソーに…………。アタシが愛の鞭で正してアゲルからね…………っ」

「なんかって…………あのね。リチウムだってこんな店に行くような…………不埒な行いはこれまで一度たりともなかったんだから！…………多分。…………それこそトランが唆したんじゃないの！？」

『何言つてンのよチビガキ！ アタシのトランちゃんがそんな事する訳が無いでしょーが！』

店の向かいに聳え立つビルの屋上の端に伏せ、双眼鏡で地を覗く女二人。ガルル…………と唸り合うその後ろで、グレープが苦笑しながらその背中を見ている。

「あの…………お二人とも…………？ 少し落ち着かれた方が…………と言いますか、あの、少しわたしの話を聞いていただけるとありがたいんですけど…………」

『で？ どうすんの？ アタシはともかくとして、リタル。アンタ

未成年だし、あんな金持ち学園に通ってるんだもの。顔曝すと後々面倒デシヨ？ ココで待つとく？』

「何言ってるのよ！ 行くわ。リチウムはあたしのパートナーなのよ。部外者なんかに任せておけないわよ」

『部外者って……っ ……ま、まア今は仲間割れは得策じゃないからやめとくケド。……なんか策でもあんの？』

「んっふっふ……。よくぞ聞いてくれたわね……。これよ！」

不敵に笑んだリタルが傍らに置いていたボストンバックを開け、中のモノをババーンと掲げてみせた。

直視後、二人はそれぞれの反応を示す。グレープは途端にキラキラした目で両手を組んでそれを見つめ、グレープは呻いて二、三歩後ずさりした。

『あんた……まさか……コレを……！？』

「着ちゃっていいんですかー！？」

「そのまさかよ！ ささ、グレープ、時間もないことだし、とつとと着替えちゃって！ クレープ、あんたはさっさとグレープの中に入って！ 髪も弄ンだから！」

「は、はい！」

「んで？ 白と黒とどっちがいい！？ 今日だけは特別にあんたに選ばせてあげてもいいわよ！」

「え、えと……っ ……出来たら白の方が……っ」

燃えるリタルと、急にやる気を出すグレープを横目にクレープは逃れられない運命を知るとがっくりと頂垂れるのであった。

『……散々呼んどいて忘れてたわ。リタルって……ガキンチョなのよね……』

「イラッシャイマセ」

両脇で、特有の怪しげな雰囲気醸し出した男達が出迎える。
内、手前に位置するやけにガタイの良い男に馴れ馴れしく寄りか
かると、リチウムはコソつと耳打ちする。

「……なあ。ここにユカリちゃんって女の子、居る？」

「はあ……ユカリ。でございますか」

「そぞ。ユカリちゃん」

「居るには居ますが……まだ出勤前でして」

ヨッシャ！ とリチウムとトランが目を合わせ親指を立て合う。
サングラス

「待たせてもらいます！」

興奮した面持ちでキツパリと言い張るトラン。

「ええ。それは構いません。けど……ふっふっふ。お客様もな
かなか、ツウなお方がたですね……まだ入って間もない新人を指名
するとは」

「いやいやそれほどでも……へっへっへ」

「では、お席にご案内します。こちらへどうぞ」

連れられてリチウム達は大きくも無い店内に入った。さすが
に早い時間帯だからなのか、客の姿は見受けられない。リチウム達
が一番乗りのようだ。

「こちらでお待ちください。お待ちの間、代わりの女の子が参りま

す」

「へーい」

「お気遣い無く」

暗いピンク色の照明。イカガワシイ雰囲気。リチウム達は席につくとボーイの背中にヒラヒラと片手を振ってみせてからサングラスを外した。

「……毎晩ありとあらゆる店をハシゴして早十日間！ よーやくこの時が来たか……」

「さんきゅうリチウム！ おまえのいやに詳しい情報やツテが無きや、こんなに早く探し出す事は出来なかったよ。……ここは素直に恩に着る！」

「おいおいトラン君。ここでは俺様の事はリッチーと呼びたまえ」
「そうだったな……本当にありがとう！ りっちー！」

ふっふっふ……と、キリリとした顔で微笑みあう二人だった。が……、

「ヨーコでえす」

「エリコでーす」

甲高い声が上がると、途端に無様に崩れてしまふ。

「わ。お二人ともお、かなりレベル高いですねえ?!」

「イケてる殿方のテーブルにつかせてもらえるなんて、感激ですわ」
「いやいやあそんなそんなあ」

「……それほど……あるけどな」

「お名前はあなんと仰るんですかあ？」

「フツ リッチー、とても名乗っておこうか」

「リッチーさま……！」

リチウムの流し目に大きな目を輝かせる巻き髪がかわいらしいヨ
ーコちゃん。リチウムが白い歯を見せるとその目はさらにハート型
に変形した。まだ、学生と言ってもいい程の若い容姿だ。お小遣い
欲しさにバイトでもしているのか。むき出しの若い太もがかなり
まぶしい。

「……で？　可愛い貴方はなんて仰るの？」

「え、ええと……トラン、て言います」

「トラン様。名前もまた可愛いわね……」

トランの頬に細指を添える盛り髪黒肌のエリコさん。実年齢は定
かじらないが、パツと見トランよりも年上に見える。大人の色気
何よりも開かれた豊かな胸元を前にトランは目を泳がせた。

「じゃあユカリちゃんが来るまではあたしたちがぁ」

「貴方がたのお相手を務めさせていただきますわ」

それぞれの女の子に首元に抱きつかれ、実にしまりの無い……表
情が崩れっぱなしの男二人。

そこへ

『〴〵お待ちなさあい！！』

凜とした声が響き渡る。

「！　誰だ……！？」

女の子に抱きつかれた状態で、それでもなんとか顔を整えた男二

人が反応を示す。

声のした方向へ視線を投げると カウンターに仁王立ちする二つの影。

「不埒な行為は絶対に許さない！」

「純情可憐な乙女を置いて他の女なんかとイチャイチャする男は、例えトランちゃんであっても許せなァい！」

『……………？』

どこかで聞いたような声に首を傾げるリチウムとトラン。

（……………ブラック、ここで照明弾よ……………！）

（……………らじゃ……………！）

と、カウンターの二人の内、極端に背の低い女の子が、銃らしきものを上に掲げる。

乾いた銃声とともに、激しい輝きを放つ白い光球が宙 天井近くまで上がり、発光。その場に居た者は例外なく目をやられた。誰もが目を背けているその隙にもう一人のすらつとした細身の女がベルトに付けたミニラジカセのスイッチを入れる。

「カチつとな」

流れ出す軽快なBGM。白光の元、二人の少女達のシルエットが浮かび上がる！

「わたしたちは、美少女仕置き人！」

「その名も、キュアキュア団！」

『キュアキュアだん〜?』

これまた、覚えのある古いネーミングセンスに訝しげな声を上げるリチウムとトラン。

徐々に弱まる光の中、二人の姿がようやく直視出来るようになる。そこには、黄緑色のふわふわした髪を腰まで下ろした、黒い衣装に身を包んだ幼女と、

緩やかなウェーブを描く金髪のツインテール、白い衣装に華奢な身体を包んだ赤い瞳の女が仁王立ちしていた。

派手なアイテムでゴテゴテに着飾ったその姿はヒーローショウにでも出てきそうな井出達。ミニスカートから覗く二人の見事な脚線美が実に眩しい。

「かわいい乙女達を哀しませる最低の浮気男は！」

「今スグお家に、帰ってもらうワヨ！」

ポーズもばっちり決まり、ご満悦の黄緑ブラックと満更でもない様子の金髪ホワイト。

ホワイトがミニラジカセを止めると、途端、店内に重苦しい静寂が満ち、温度低下が加速する。

(あの〜。なんだかとても恥ずかしいんですけど……)

冷え切った室内と突き刺さる多量の痛い視線を感じ取ったのか、ホワイトの体内^{なか}でグレープがボソリと呟いた。

「アンタは黙ってなさい！」

「……あのー。キミたち？ 一体どうやって店の中に入ったのか知らないけれどね」

「他のお客様のご迷惑になるからさあ。さっさとそこから降りて出

て行つてくれないかなあ？」

「ってか……キミたちよく見ると随分かわいいね。いっそのまま、この店で働いてみる気ない？」

数人のボーイが美少女仕置き人を取り押さえようと迫るも、

「くつくつく。綺麗な薔薇にはトゲがあるのヨ？ ムヤミに近づくとどうなるか。分かつてナイようだから教えてアゲル。ブラック！」

「らじゃっ」

黄緑ブラックが自身の太もものホルダーから銀色の銃（いつものアレだが、いまやゴテゴテと装飾されており原型を留めていない）を鮮やかな手つきで取り出し、銃口をボーイの一人に向ける。

「いくわよー！」

弾倉を廻し引き金を引くと赤い球が飛び出した。赤玉は一瞬にして身の丈サイズに巨大化し拳状の形をとると、目標物を力いっぱい殴り飛ばす！

「ぐえっ」

最初の標的は壁に叩き付けられ絶命　もとい、昏倒した。先程まで標的の立っていた位置にボテッと赤い拳が落下し、瞬時に消失する。

「ひええええええ！」

「次！」

「ぐは！」

「うほっ」

射撃を得意としているのか、ブラックは銃を連射。標的に逃げる間を与えない。

成す術も無く赤い拳の餌食となりバタバタと地に沈むボーイ達。女の子達が一斉に悲鳴をあげて店内の奥へと避難する。

果たして、薄暗い店内に残ったのは未だカウンター上に立ったままの二人の美少女仕置き人と……リチウム、トランだった。

「さあ！ 邪魔者はいなくなっ たわよ！」

「覚悟なサイ！」

銃口を二人に向けるブラックと、腰を低く落として身構えるホワイト。

「……あの〜キミたち？ 一体なんでこんなことするのかなあ……？」

「ええっと……俺様たち、キミたちに何かしたっ けか……？」

ようやく狙われているのが自分達だと気づいたのか、引き攣り笑いを浮かべたままノロノロと後退するトランとリチウム。

「〜問答……っ」

「……無用！」

躊躇無く例の拳骨弾をリチウムに向けて連射するブラック。

「〜い……！？」

一方、宙へ舞うと三回転半をかまして華麗に肉薄したホワイト。

握り締めた拳がトランの目前に迫る。

「う……！？」

二人の少女の目が瞬間、無慈悲な輝きを灯した。

「リチウムの……おばかあ！！」

「アタシというモノがありながらアあああ！」

「うっぎゃああああああっ！！」

夜の降りた街中を、男二人のおどろおどろしい断末魔が轟いた。

4

「……ですから。トランさんはお仕事で、家出少女の搜索をしていた訳なんです」

すっかり荒れ果ててしまった店内。

既にボロボロのリチウムに、なおも往復ビンタしていたリタルと、グレープの身体を出、半透明の身体に戻ってもさらにトランを踏みつけていたグレープは、グレープののんびりした声に目を丸くして行動を止めた。

「へ？」

「確か、二週間位前でしたでしょうか、トランさんからそのような伺いました。

なんでも、搜索願の少女が、この街のイカガワシイお店で『ゆかりちゃん』と名乗ってアルバイトなさっている……という所までは判ったそうなんです、その『ゆかりちゃん』が警察屋さんの動きに気づいたのか、アルバイト先を点々と移動なさって。

おかげで搜索は難航して、トランさん達相当苦労されていたようなんです」

「……じゃありチウムは……！？」

「はい。リチウムさんはこの街の裏事情に詳しいから……と、トランさんが協力を仰がれて、ですねえ……」

グレープの言葉に、青ざめた二人。リタルは掴んだままだったヘロヘロ男をドサツと床に落す。

『それじゃあトランちゃんは……無実！？』

「な、なんで最初からそう言わなかったのよおグレープ！！」

「だって直前まで忘れてましたし……お二人ともとても興奮されていたので……」

『……………』

「あの〜」

絶句している二人の背後で、恐る恐る声をかけてくる若々しい女の子が一人。

「『ユカリ』はわたしなんですけど、あの……わたしがどうか、しましたか……？」

二人のこめかみがピクリと動く。

「〜あんたの……！」

『〜せいでエ……！！』

「……え、えええ！？」

再び戦場と化した店内。薄暗い室内のあちこちに散った男達の屍。特に状態の酷い情けなさ全開の男二人が床に突っ伏しているその周

りで、怒れる美少女仕置き人二人組（正確には一人と一幽霊）が追いかけてここを展開する。

すっかり怯えて出てこない憐れなキャスト達のその横。惨劇を忠実に物語る罅割れた姿見の前で、グレープだけが一人、嬉々として己の姿を見ていた。

「わぁ……。プリ ユアみたいです」

……。合掌。

2・青年 岩岩（ガンガン） 1 『それゆけトランちゃん』

トラン 「っていうかさ……なんで」

リタル 「なんでわかったのかって訊きたいの？ 簡単よ。てか、あんたってばかりやすすぎなんだもの」

トラン 「……わかりやすすぎって……（青ざめ）」

リタル 「あんたって顔は愚か行動にまで出やすいんだもの。馬鹿正直ってゆうか……それ以上？」

トラン 「マジで？ そんなに！？（ひい／ムンク）」

リタル 「丸わかりってか。丸出しもいいところ。もう、一話でのあなたの登場シーン時からね。わざとやってんのかって位。一部の貴重な読者さんからは、あんたがあのコに意図的に触ろうとしてるのが見え見えだー（怨）ってすっごい反感かってるらしいわよ」

トラン 「は！？（赤面） そんなことあるわけが……！ ……って、誰だよその『一部の読者さん』ってのは（汗）」

リタル 「（ぼそぼそ）……んなこと聞くなつつつの……下手に正体バラして、あたしまで目えつけられたらたまったもんじゃないわよ……あんたみたく取り憑かれるみたいに延々と纏わりつかれて拳句、最期は養分だなんて……死んでもごめんよ……ブツブツ」

トラン 「……なんだって？」

リタル 「（咳払い）こつちの話よ。……ま、全く気付いてないあのコもどうかと思うけども。トラン。忠告しとく。これからあんた、よつぽど頑張んなきゃ、この先「奇跡」の「き」の字も降臨してくんないわよ？」

大体、本編では今の時点（乾クエ2「蒼天の鈴歌」後半）で、あんたなんと瀕死状態なんだから。おなかに穴あいちゃってるから。このままいくと本当にシャレにならないから」

トラン 「……かなあ……（宙に目を泳がせる）……。くかもなあ……（肩を落とす）」

リッチー 「（わなわな）……そうか、そうだったのか……」

リタル 「あら、リチウムおそよう。毎度の事だけど一応ツツコンどく。もう夕方よ?」

トラン 「ってかおまえ。なに震えてんだよ。……アル中か?（真顔）」

リッチー 「……いや、俺様もそうじゃねえかとは思ってたんだ……でも……そうか………やっぱり、そうだったのか……（トランに向き直り、ずすいとトランに接近）く安心しろ、トラン。」

……おまえは、今、報われた（美青年フラッシュノ両肩に手置き）

トラン 「………は?」

リッチー 「（真顔）く前もって宣言せんでもわかりきっている事だとは思う。だが、俺様はあえて言おう。」

俺様は責めだ。覚悟しろ」

トラン 「（青ざめ／鳥肌）　　ゝって、どんな覚悟だ馬鹿野郎！？
（殴）」

リッチー 「（殴られても平然）　　ゝなんだ違うのか。俺様はてつき
り（淡々）」

リタル 「なんだ。違うの。あたしもてつきり（淡々）」

トラン 「って、えゝ！？（仰天）」

クレープ 「（ド吃驚）　　ゝえ！？　　そうなの！？　　違うのトランち
ゃん？！

……冗談デシヨ？（おそろおそろ／顔覗き込み）」

トラン 「ゝおのれら今まで一体人をなんだと……（ワナワナ）」

グレイプ 「……トランさん……。　（両手を組み瞳を潤ませ、首をぶ
んぶん）　　ゝいいえっ素直になりましたよう！　　世界がどういう反応
を示そうと、わたし、トランさんの恋を一生懸命応援しますっ

素直なトランさん、素敵だと思いますっ（ぐ）」

トラン 「……ゝいや。ねえ……。　　……そうくるんじゃないか
なあゝとは思ってたんだけどさ……　　実際そうこられるとさ……
はは……（沈下）」

グレイプ 「？」

3・at the break of dawn　く東の空が白むころにく

『魔眼』でサーチして、

『転位』で侵入して、

障害物があれば、『死球』で消して、

『転位』で帰る。

だから、これまで。

あたしたちに盗めぬ物など存在しなかつた。

魔石は、人を魅する。

仕事柄、今まで様々な魔石を目にしてきたけれど、そのどれもが、それぞれ違った不思議な輝きを秘めていた。

中でも禁術封石　強い力を持つ魔石は格別だ。

小さな図体の中、眩いばかりの輝きを秘め、抱く色彩はどこまでも深く鮮やかで……まるでこの世の物ではない。

いつまで眺めていたって飽きない。

だからどんなに禁止されていたって、いくら警察が取り締まっても、禁術封石を集めるコレクターとなる金持ちは後を絶たない。

禁術封石のコレクターは、その強力な魔力を自分の物にしたいと集めている……そんな奴ばかりじゃなくて、その大半が、眺めているだけで幸せ……といった、人畜無害な平和ボケの方が多いのが現状だ。

大体。魔石は、人間にとって至極便利な物だけど、禁術封石の持つ魔力量は人間にとつては毒でしかない。

あんなものが転々と存在するこの世界を創った『三つの巨石』なる世界の創造主　所謂、カミサマとやらは、人間に鬼程酷い事をしたと本気で思う。

……まあ、禁術封石の元は魔族なんだけども。

話を戻そう。

魔石を使う事が出来るのは、三大種族の中でも魔力を一切持たない人間だけなんだけど。禁術封石に関しては、使いこなせない者の方が多い。

でも石つていうのは、一度使ってみない事にはそれを使いこなせるかどうか判別出来ない。

さて。

使いこなせない者が禁術封石を使おうとすれば、一体どうなってしまうのかというと。

石に体に乗っ取られ、精神は崩壊して。

ただ魔力を放つ為だけに存在する……魔人となってしまうのだ。

人間辞めて晴れて魔人に。

そんなリスクを負ってまでわざわざ試そうとする人間はそういうい。

だから、あたしたちが盗みに入るのは、そういう危ない奴の所じやなくて、専ら、眺めているだけで……な平和馬鹿のお家になる。

一度見てしまったら、どんな事をしたって欲しくなる。
手にしてしまったら、手放したくなくなる。

そんな強烈な魅力を禁術封石は持っている。

だから、それがどんなに危ないものでも、どんなにそれを諭したって、死んでも手放したくない　そう考える大馬鹿者が世界には大勢居る。

そんな連中の家に盗みに入るのだ。

そんな連中から石を取り上げる。

恨まれる事請け合いなこの仕事。

……だが。

あたしたちが、警察に訴えられる事はそんなに多くはない。
だから、警察だって捕まえられないんだけど。

理由は判っている。

一つは、……禁術封石自体、所持する事を警察が禁じているので、
訴えにくいという事もある。

そして、もう一つの理由は……、

「……………、なんだよ」

面倒臭そうな表情。

魔石の使い過ぎで動けなくなったあたしを負ぶったりチウムが、
あたしの視線に顔を向けた。

今夜も無事、一仕事終えて、帰宅する道中だった。

眼下に広がる街並みに、点いている明かりはほとんど無い。
濃密な夜闇の中、緩やかにはためく漆赤のマント。
涼し気に流れる長い銀髪が、ほのかな月光を反射する。

あたしというお荷物がいても、いつものようにリチウムは、鎮ま
った空気を乱すことなく、軽やかに家々の屋根を飛び移っている。
それはまるで、夜風が通るように、星が廻るように。
この男の動作は、極めて自然だ。

寝静まった世界。

リチウムという男は、この闇の中で唯一、動くことを夜から許さ
れた存在……のような、……そんな妙な感じさえ覚える。

それ位に、この男は夜に溶け込んでいて、しなやかな動きをする。

「……おつまえ。まだぶーぶー言う気かよ」

面倒臭さ気な表情に、さらに呆れた青瞳の光が上乘せされる。

「……………」

無言を肯定と受け取ったか、溜息を吐くと、リチウムは後頭部を
掻きながらさらに言葉を付け加えた。

「……ンな目しなくても、背負われんのが不服だつつうのはもう十
二分に理解してンから」

普段よりも強く響く声と共に、白く上がり、宙に溶ける息。

いつもはこの男の背中を追って、自分も屋根を跳んでいた。

今日盗みに入った家の主は相当用心深かったのか、大豪邸と言える程広い家の中にありとあらゆる罠が仕掛けてあった。

この疲労は、禁術封石を酷使したから……というのも一因ではあるが、

どっちかというところ、体力を相当削られてしまった事の方が原因と言える。

そういえば、最近魔石の研究に没頭していてロクに体を休めていない。

日頃の生活態度の悪さが祟って、動けなくなり、この失態……という訳だ。

「……別に」

リチウムだって毎夜『死球』を連発し、あたし以上に動き回っていたというのに……これこの通り、奴はピンピンしている。

なのに、自分だけ戦闘不能に陥るって……。

……そんな事実が悔しくて、気恥ずかしくてしょうがなかったあたしは、一言だけ、呟くように口にするのが精一杯で。

それでも耐え切れずに、ぷいっとそっぽを向いた。

ああ、情けない。

落ち込みつつ、ほぼ無意識に流れる風景を眺めていると、時折銀色が視界を覆い、顔を曇る。

再び盛大に溜息を吐けば、何も言わずに正面を向くリチウム。見えないが、さぞ面倒臭そうな顰め面をしているに違いない。

会話は途切れ。

静かな、静かな夜。

「……………」

こうして至近距離………というか、大変不本意ではあるが、背中に耳をくっ付けていると、この男の中を流れる血液の……鼓動の音やら、僅かに上がっている息遣いなどを感じる事が出来る。

「……………」

改めて、この作り物のような容姿を持つ男が、自分と同じ生き物なんだなあと実感せざるを得ない。

一見細身に見えるが、意外としっかり筋肉が付いている腕や。広い背中。

……この男は、全身凶器だと思う。

サラサラとした手触りの銀の色の髪は、儚く感じられる程美しく。鋭い青は………あの、禁術封石の輝きにも似ている。

視線をよそに移したって、脳裏にこびり付いてしまっただ目逸らす事は許されない。

如何なる抵抗も無駄。

その輝きは、褪せる事を知らない。

深夜の濃い闇の中。

月明かりを背に佇むこの男の存在は本当に毒でしかないのだ。盗みに入った家の住人を、この男は、魔石以上に魅了してしまうのだから。

警察に届ける気になる人間も出ない程だ。

と、視線を感じてそちらを見れば。

深い、深いブルーアイに、あたしが映っていた。

「……んだ」

驚く程、間近にある、鮮明な青の光。

不覚にも。

見慣れたはずのあたしでさえも、心臓が跳ね上がる。

「寝てンのかと思った」

ニヤリと、不敵な笑みを浮かべるリチウム。

「……っ」

……なんとなく、悔しい。

「……やっぱり降りる。自分で動く」

「でも実際立てないんだからしゃーねえだろ」

「あたしまで毒に当てられたくない……」

「……て、こらまで。誰が毒だ誰が」

「自分で帰る」

「……って、こら暴れるな！ 落したらおまえ文句ぶーたれるだけじゃ収まらねえだろが!？」

「そんな事当然でしょ!」

「あんなぁ……リタル」

「なによ!」

じたばたともがいていたその背中で、

「……もう少しだろーが。たまには大人しくしとけ」

宥めるような、妙に大人っぽい男の声が溜息混じりに響いた。

「……………」

……コイツは。普段は大馬鹿者なのに、時々すごく「大人」になる。

こういう時のこの男に、あたしは勝てない。

「……たたくもおお……」

憮然として、……まあ、言うとおり、コッパズカシイけど、たまには大人しくしている事にした。

「観念したか」と勝ち誇るリチウムの背に、再び頬をくつつける。

……うん、たまには。

たまには、いいかもしれない。

ふと見上げれば、東の空が白ばんでいる。

本当に、もう少しで、夜が開ける。

この男が支配する時間が終わる。

この男との時間が終わる。

……こんな妙な夜は。

こんな夜だからこそ、普段から抱いている疑問が、口をついて言葉と昇華したのか。

「……ねえ」

気がつけば、心地よい沈黙を自ら破ってしまっていた。

「何」

いつものように、短いバリトンが返ってくる。

「あのさ。もしさ、もしあたしが……」

禁術封石が使えなかったら。

魔石を改造出来る頭脳と器用さを持ち合わせていなかったら？

……少しも役に立たなかったら。

それでもあんたは、

「……なんだよ？」

見失って、途切れてしまった言葉の先を、リチウムが急かした。

「……いや、やっぱりいい」

呟いて、そっぽを向く。

「なんだよ？」

「だから、いい」

「……、」

この数年間。一緒に居て。

たったの一回だけの、こんな変な夜は。

このあたしだって、素直に毒に当てられてるのも有り………なのかもしれない。

……けど。

「……………」

流れる銀糸を眺めて、
強烈な青を脳裏に浮かべて、
視界を閉ざす。

……いや、

もうあたしはずっと前から、毒に当てられていたのかもしれない。

「……へんなやつ」

思いがけない程。

この男にしては、異様に、優しい声がかかって、ふいに遠い記憶が、降臨した。

いくぞ。

……もうあたしは。

ずっと前から、毒に当てられていたのかもしれない。

今ではもう遠い、無音の世界。

光さえ届かない、世界から隔離されたような場所で、それでも。
短い声が降った。

長い長い闇が明けた、あの時から。

4・青年 岩岩（ガンガン）2 『それゆけファアーちゃん』

リッチー「……いやさア……てかさア……？ 今さらなんだが『青年 岩岩』って響き怪しすぎじゃね？」

トラン「仕方ないだろ……俺らが『少年』って歳かよ。ちなみに、俺は二十一歳。リッチー見た目年齢俺より上」

リッチー「おまえが童顔だから毎度俺様が上に見られるだけだろうが……つか、おまえまでリッチー呼ぶな（ジト目）」

「たく前はあえてツツコミやしなかったが、なんなんだリッチーって……ただでさえ俺様本編出番少なえのに読者のカワイコちゃんに妙なイメージが……（ブツブツ）」

クレープ『出番の少ない主役なんて前代未聞デシヨ。トランちゃんと交代したら？（しれ）』

リッチー「……………（体育座り／地面に「の」の字）」

リタル「はいそこ拗ねない」。 （リッチーの背後から襟首掴んで引き上げる） ってゆうか。話脱線してるって。

ま。十中八九。このタイトルの怪しい響きははアンタチが原因よね……………（溜息）」

クレープ『そうとも言切れないんじゃない？ もう一人いるわよ。怪しいのが』

リタル「え？ もう一人って……（訝しげな表情のまま魔眼を発動……するまでもなく微かに漂うクレンザー臭を嗅ぎわけ恐る恐る

上空を仰ぎ)」

ファー「……………（眼鏡クイ）」

トラン「……………いたのか……………」

ファー「居ては悪いですか？（眼鏡クイ）」

リタル「悪い」

リッチー「てか、てめえ一体いつからそこにいやがった？　どっから湧いて出やがった？」

ファー「貴方が来られる随分前からですよ（眼鏡クイ）　って、なんですか。人を汚らわしい虫のように……………（顔を顰める）」

リタル「どこまで暇こいてんのよ不良天使」

グレープ「お久しぶりですファーレンさん（にこ）」

ファー「おやお久しぶりですグレープさん（にこ）」

リッチー「てかなんでおまえグレープにだけ、ンなに愛想いいんだ……………」

トラン「グレープちゃんこっちこっち。そんな奴の近くに居ると、クレンザー臭が移っちゃうよ？」

グレープ「…………ええっと（汗汗）」

ファー「……………（無然とした表情／眼鏡クイ）」

クレープ『ネ？　一番怪しい（指差し）』

リタル「確かに。こうしてみるとこれほどストーカーが板に付く天使つてのもいないわ……………」

ファー「人聞きの悪い。（眼鏡クイ）　といいますか、私がタイトルに関連してるわけがないでしょう」

リッチー「なんでだ」

リタル「なんでよ」

ファー「私の実年齢は既に貴方方の言う『青年』という域を越えていますから（眼鏡クイ）」

クレープ『あ。それもそうか』

リッチー「……………爺……………（ボソリ）」

ファー「いいのですかりチウム私にそんな口をきいても……………さ
らに出番を少なくしてさしあげてもよいのですよ……………？（眼鏡クイ）
貴方の命を握り潰す事など赤子の手を捻るようなものですからね。
大体。常日頃から思っていた事です。貴方はもう少し私を敬う
べきなのです。何故ならば貴方は覚えていないのかもしれませんが、
貴方のその肉体は私の……………」

リッチー「破廉恥！！（赤面／ジャンピングパンチ）」

ファー「!?!? …… な!?!? (殴られた頬押さえ/実は打たれ弱い/眼鏡罅割れ)」

リッチー「俺様の肉体がためえのものだ?!? (青ざめ)」

「何をした!?!? てつめえっ寝ている無防備な俺様の肉体に一体何をしやがったああ!?!? (発狂寸前)」

ファー「は!?!? (呆然) い…… 一体なにを言っ……!! (眼鏡罅割れ)」

リタル「てつきりただの人畜有害な掃除オタクだとばかり思っていたのに……っ (青ざめ/仰け反り)」

トラン「人畜有害な掃除オタク+Hだったなんて……っ (青ざめ/仰け反り)」

ファー「な、なんですかそのプラスエイチというのは……っ (眼鏡罅割れ)」

トラン「HENTAI」

ファー「なんということ……っ (愕然/眼鏡罅割れ)」

(キツと一同を睨み返し)「いいですか!?!? 貴方方の最大の欠点は人の話を最後まできちんと聞かずに暴走する点です!」

「私が言いたいのは、そのリチウムというふざけた男は私の……」

リッチー「! まだ言うか!?! (赤面/死球発動)」

ファー「ぐお!?! (眼鏡消失)」

リタル 「HENTAI眼鏡（冷ややかな目）」

トラン 「HENTAI天使（冷ややかな目）」

クレープ『……ふ』

ファー （よろよろ）「笑いましたね?! 今、笑いましたねこの場で唯一事情を知っているその腹黒女狐!（ノ タ）」

クレープ『……あら。一体なんのことかしら。ファーちゃん?（黒笑）』

ファー 「く……っ 相も変わらずなんて腹黒な……っ（ビタ）」

グレイプ「……ファレンさん……。 （続く衝撃事実発覚に両手を組み瞳を潤ませ…… 首をぶんぶんノそれでもグレイプ負けない）いいえっ素直になりましょう! 世界がどうという反応を示そうと、わたし、ファレンさんの恋を一生懸命応援しますっ

素直なファレンさん、素敵だと思いますっ（ぐ）」

ファー 「……そういうことですか……… そういうオチできましたか………（がつくりノ沈下）」

グレイプ「?」

クレープ『………ふ』

5・真実の口

1

リタル・ヤードが毎日通っているアイオン教会は、なにしろ広大だ。

荒波に囲まれた島国、プリムス国の中心から、空へ真っ直ぐに突き出た教会の真白の尖塔は今や国のシンボルと化している。

設立十八年。白を基調とした、人々を魅了する繊細な造りの美しい建物。中央都市グノーススの中心を堂々と陣取っている緑豊かな敷地の真ん中には立派な噴水も設けられ、花壇には色取り取りの花が咲き乱れている。

この見事な庭園も含めた敷地内総ての建造物がアイオン教会のものだというから驚きだ。

敷地内にはグノーススの学習施設であるアイオン学園や孤児院、さらには資料館なんてものも設置されている。

敷地の地下に存在する博物館染みた室内には、プリムス国内から集められた貴重な歴史的資料が数多く展示、保管されており、閲覧を目的とする者が観光客の波に紛れアイオン教会を訪れる事も決して少なくない。

中でも、資料館の最奥の部屋には特に重要な物が保管されているらしく、入口脇には常に二名の警備員が立っている。厳重に施錠され、一般人は愚か、アイオンに勤務している人間にすら非公開とされていた。入室の権限を持っているのは国王と教会長位だ。

が、唯一。アイオン学園に通う生徒達だけが例外として存在していた。

生徒として在籍する九年間の内、たったの一度だけ、最奥の部屋

を見学できる機会が彼らには設けられている。

その貴重な時間は、リタルの在籍する六学年の歴史の授業のカリキュラムに盛り込まれていた。

今日がまさに待ちに待ったその日だ。

頭の上で二つに分けて編まれた黄緑色の髪がスキップのリズムとともに元気に弾む。

リタルは知らぬ者から見てもそれが解る程に嬉々とした様子で通学路を進んでいた。

というのも、資料館の最奥の部屋　通常、開かずの間に保管してある物は大量の禁術封石だ、という噂話が生徒間で飛び交っていたからだ。

フロース
世界法で人間が所持する事を禁止されている禁術封石を、教会が一体どうして地下なんか……それも、大量の数を保管かくしているのか。

取り締まっている警察機関は何も言っていないのか。

それらをどうやって収集したのか等、考えてもさっぱり解らないいや、この際どうでもいい。

重要なのは噂の信憑性。

在る《ほんとう》か、無い《うそ》か、だ。

高等部の校舎に出向き、昨年開かずの間に足を踏み入れたであろう七学年生に接触してみたところ、噂話はどうも真実らしかった。突然現れた小柄な少女に驚いた後、どの生徒もあんなの初めて見た、と口にする。

尤も、彼等が見たものがレプリカだという可能性もある。まあ、普通に考えてその方が自然　しっくりくる事は確かだ。

とにかく。これ以上は実際に、リタルが所持する二つの禁術封石

の内の一つ『魔眼』で保管されている石^{フツ}を視る事以外確かめる術は無い。

超強力な結界が張つてあるのか、はたまた妨害魔力が飛び交っているのか。地下では高性能魔石探知機^{レーダー}の類は総て使用不能となってしまうのだ。

（しっかし……現役ストーンハンター兼、美少女天才小学生と名高
いあたしの可愛い発明品ちゃん達^ズを上回る程の妨害魔力が存在する
とは。……一体どんなゴツツイ防犯設備を施してイラッ Шарるんだ
か）

地下の設備が嚴重であればある程、噂話にも真実味が増してくる。
幾ら設備が調つていようと多少の無理をすれば、自称凄腕ストー
ンハンターたるリタル達フォルツェンド一味に成せない事はないだ
ろう。

だが、退学というリスクを背負つてまで単なる『噂話の真相暴き』
なんてしたくはない。

そもそも今は行動に移る段階ではない。成功したところで骨折り
損のくたびれもうけになりかねないからだ。

彼らが動く時は、背負っているリスク以上の利益が確実に得られ
るという、その確証が得られた時だ。

そして。待ちに待った今日という日がやってきた。

見学という、これ以上無い位に自然なお題目で開かずの間に難な
く侵入　容易に確証を得る事が出来る、貴重な一日だ。

もし噂が真実で、開かずの間に保管されているものが本物の禁術
封石だとすれば。帰宅後すぐにパートナーであるリチウム・フォル
ツェンドを叩き起こし、急ピッチで作業に取り掛からなくてはなら
ない。

なにせ、相手は『教会』だ。立場や歴史、それに教会組織という巨大なネットワークと資金源がある。敵に回せば面子にかけて自分達を仕留めようとするだろう。後々動きにくくなるのはごめんだ。ドいちみ
事態が明るみになるのを避ける為、石をただ盗み出すだけではなく、こちらで作製したレプリカとすり替える必要がある。

噂では大量にあるとされている禁術封石。見学会時に総ての石の形状と数、展示位置等を記録し、相応のレプリカを揃えねばならない。時間と労力がかかるだろう。

だがそれさえこなしてしまえば、すり替え作業は二人にとって、そう難しい事ではない。

リタルの持つもう一つの禁術封石『転位』は、一度足を踏み入れた事のある場所ならどこへだって瞬間移動する事が出来るというものな
んとも便利な石だ。もの

したがって『見学』として開かずの間に足を踏み入れたが最後、保管物は総てリタル達の手中同然だった。

如何に厳重な警備、施錠、防犯設備を施した所で、目的地に転位してしまえば侵入も、退却だって一瞬だ。

（んっふっふ。すぐにリタルちゃんがお迎えに行つてあげるから待つてなさいよ愛しの獲物達！）
ターゲット

禁断の開かずの間。そこには一体どんな禁術封石がどれだけ隠されてあるのか。それらを改造すれば、一体どんな素人らしい機械に变身するのか。特に後者の想像は際限なく膨らみ
知らず、軽い足取りとなる。

ニマニマとした締めりのない顔。爛々したエメラルドの瞳。遅刻と早退が重なり病弱と認識されている優等生の奇行を、奇妙な物でも見たというような顔で振り返る生徒達。周囲の視線を力いっぱい浴びるも特に本人は気にする事もなく（気づかぬ程浮かれていたという説もあるが）、軽快なスキップで教会敷地内に入っていた。

この後、『世界の破滅も招きかねない恐ろしい事件』が彼女たちフォルツェンド一味を待ち構えていた事なんて当然、気づくはずもなかった。

2

『で？ 今、責任者としてグレープが、アンタ達の担任と肩並べて絞られてる最中ってワケ？』

時刻は夕方。グノーシス西部にある、十一階建ての古びたマンシヨンの一室。

グレープの帰宅が遅い事を不審に思った同居人達から尋ねられたリタルは、今日起こった事故について説明するハメになってしまった。

「だって。学園にとっちゃ一大事よ？ 幾ら生徒がやらかした事とはいえ、教会で嚴重に保管されていた、超貴重とされている展示物を破損してしまったんだから」

事の次第はこうだ。

リタル達六学年の生徒は、四時限目の歴史の時間の際、歴史担当の教師 リタル達の担任でもあるナカジマ神父 通称ナカ爺と、シスター 副担任のグレープ・コンセプトに引率され、地下二階、資料館へと足を踏み入れた。

広い展示室に整然と並べられたガラスケースの周りを生徒達が順に巡る。資料館へは開かずの間の調査の為、何度か足を踏み入れている。よってリタルが興味を示す物はもうこの場には無かった。

『ちよつとした事故』は、彼女の興味と期待を一身に背負った室

内最奥の開かずの間『保管庫』で起こる。

首謀者は、家がお金持ちな事で有名な小太りの男子生徒だった。

仇名は、まんま、ボンボン。

ボンボンはストーンコレクターの息子で、この日のために家から、とある禁術封石を持ち出していた。

それは、『クリア』と呼ばれる白く濁った禁術封石で、発動させると所持者は、あらゆる障害を通り抜ける事が出来るようになるという代物だ。

ボンボンは他の生徒数名と組んで、ガラスケースに並べられた禁術封石の内の一つを盗み出そうとしていた。

しかし、『クリア』発動時に発生する魔力の波動に、同じ時、同じ場所で『魔眼』を使用していたリタルが気づかぬ訳もなく、当然彼女は彼らの背後から声を張り上げて行動を咎めるという行為に出る。

リタルの大声に必要以上に驚いたボンボンは、その拍子にガラスケースから取り出したばかりの、とある禁術封石を落としてしまう。

比較的近くにおり、いち早くその騒ぎに駆けつけた副担任^{シスター} リタルのホームに何人が居る同居人の内の一入であるグレープが、男子生徒の手から零れ落ちた禁術封石を受け止めようと屈むが、その手はあと一歩、届かなかった。

結果。グレープの目の前で、展示物の一つである、とある禁術封石が破損。粉々に砕け散ってしまったと、こういう訳なのである。

「大丈夫かな……グレープちゃん」

同居人の一人 刑事で、リタル達ストーンハンターにとって天敵とも呼べる存在でもある黒髪の青年、トラン・クイロが心配気な面持ちでボソリと呟く。

彼にはグレープが今浮かべているであろう暗い顔がはつきりと目

に見えているようだった。

『もしかして、今度こそグレープ。クビ？』

宙に漂いながら耳を澄ませていた金髪の不良遊霊クレープが話に割り込んできた。

「そんな……っ」

『だってあのコ、これまでも散々しかしてきてるデシヨ？　だから、OBで……しかも勤めてかれこれ二年は経ってるつつうのに、未だに「シスター見習い」してンじゃない』

グレープ・コンセプトは、魔石の魔力を触るだけで暴走させてしまふという特異体質の持ち主である。

曰く、魔石そのものと合わない体質ではないか、だの、アレルギー症状のようなものではないか、だの、全ての目に『最悪』が出揃うはずがない。『最高』に相性の良い属性の魔石が存在するのではないか、だの理由について散々周囲で討論されてきたが結局判明されぬまま。石化製品に囲まれているこの世界で、しまいには『歩く破壊魔』という異名を授けられてしまった。

「けど、彼女のアレは体質で……わざとやってる訳じゃないんだし」

トランのフォローに赤い目を細めるクレープ。

『ワザと備品をぶっ壊して回ってんのなら、とっくの昔に学園追いつ出されてるデシヨ』

薄い腹全開で宙を一回転すると、トランに近づく。

「けどさ……！」

頭の上で一つに纏められたゆるやかな金髪のウェーブがトランの頭にかかった。

『そうやってあのコに甘いのは、トランちゃんだけ。なんでもかんでも魔石で動いている世の中はそうはいかないデシヨ』

「まあ。十中八九、クビって事にはならないと思う」

クレープとトランの会話に溜息交じりの声で割って入るリタル。

『なんでヨ？』

「レプリカだもの。アレ」

リタルは落胆した様子で溜息混じりに告げた。

先に報告を受けていたのか、ソファに寝そべっている長い銀髪の青年　リチウム・フォルツェンドはその言葉に何の反応も示さない。

クレープ達の驚愕の声に、もう一度だけ盛大に溜息を漏らすと、リタルは詳細を語り始めた。

念願の開かずの間に入室後、噂通りにガラスケースに並べられた、大小様々な形をした、色取り取りの禁術封石達。さながら宝石店といったその光景に両手を組み、エメラルドの瞳をこれでもかという程キラキラ輝かせたリタルは、即座に『魔眼』を発動させ、一通り見渡してみた。しかし、

「開かずの間の展示物に魔力らしきものは見えなかった。微塵もね。大方あの大袈裟なまでの防犯設備は、保管物がレプリカである事を外部に知られたくないが為に設置されたものなんでしょう……」った

くもお、紛らわしい……っ」

「なるほど。それでおまえ、いつまでたっても不機嫌面なんだ」

『レプリカなら壊れたって替えなんて幾らでも造れるわね。尤も、
教会としては是が非でも展示物レプリカを本物として扱いたい、だから今回の件を大事にはしたくない。って事で、グレープをクビにする理由が消失する、か……って。ンじゃなんだってあのコ、帰りが遅い訳？』

「さあ。けど、あのコがこれまでに起こした不祥事は星の数ほど存在するらしいから。大方、前の件でも持ち出されて絞られてるんじゃない？」

さして興味もないといった風にリタルが口にしたその時、

「ただいま帰りましたです」

特に落ち込んだ様子も無く、噂の人物が買い物袋を片手に帰宅した。

肩まで伸ばしたストレートの青い髪を後ろで一つに纏めた華奢な少女が、スキップらんらんで鼻歌交じりに買い物袋を振り回しながらリビングへやってくる。

落ち込むどころか、なんだかいつも以上に機嫌が良さそうだ。膨大な負のオーラを背中に背負ったの登場を予想していた一同は顔を見合わせた。

「……どーしたのグレープ」

「グレープちゃん？　なんか……嬉しそうだね」

『アンタ……怒られてたんじゃないの？』

「？　そんな事はないですよ？」

クレープと瓜二つの細面に浮かべた輝く笑顔に、露骨に眉を潜め

るリタル。

「放課後、ナカGと一緒に学園長室に呼び出されたでしょ？ 資料館の件で学園長に絞られたんじゃないの？」

「ええ、わたしも呼び出された時はそうかなって思ったんですけど……単なる世間話でした」

「は？」

間抜けな顔で素っ頓狂な声を上げて リタルはぐつと背伸びをするそのまま、グレープの赤い瞳を覗き込んだ。

グレープは素直というか……嘘のつけないタイプだ。嘘をつくよう強制されたり、無理やりにも虚言を吐こうとすれば、謙虚なまでに態度に出る。

一同を心配させない為にわざと明るく振舞っているのかと思ったのだが

「？ どうかされましたか？ リタルさん」

……どうやら、嘘は言っていないようだった。

「結局は生徒がやらかした事なんだしょ。お咎めナシって事になったんじゃないかねえ？」

寝そべったままその光景を眺めていたリチウムが、トロンとした目を擦りつつ、面倒臭そうに口を開く。と、即座にリタルの首は横に振られた。

「アイオンは生徒の校則なんかはゆるゆるだけど、一方で教師の責任問題なんてのはむちゃくちゃ厳しいのよ。ギャンギャン吠えるタイプの保護者が多いとかで自然とそういう風になっちゃったみた

いだけど。それに『生徒がやらかしたことだから』とか、そんなゆるい理由で言及が避けられる程、学園の性質が温厚だつてんならそもそも、これまでグレイプが無意識に魔石を暴発させてきた件だつて『わざとじゃないんだから』、責められるような事になりはしなかったはずでしょう？ 矛盾してるじゃない」

何か裏があるのかもしれない、とリタルが軽く握った拳を口元に持つてきて唸り始めた時、グレイプがあっけらかんと言いつつ放った。

「わたし、今日はとても運がいいんです。だからだと思えます」

上機嫌の笑顔。根拠の欠片も無い言葉。子供のような無邪気な反応に毎度の事ながらリタルは強大な溜息を深々と吐いてから腰に両手をあてると、ジト目でその顔を見上げる。

「……あのねグレイプ。運の良し悪しで説明出来る事柄じゃないからこれは」

「そうなんですか？」

「そうなの！ ったく、人が心配してりゃあノー天気にも程がある……！」

「運がいいって……他にもなんかあったのかい？ グレイプちゃん」

話題を変えようとランが努めて明るい口調で二人の間に割って入る。無然とした表情のまま、それでもリタルは口を噤んだ。彼女としても少し気になるらしい。

「ええ、実はですね。……じゃーん」

言つてグレイプが満面の笑顔で差し出したのは……グレイプが好んでグッズを揃えている、とあるキャラクターの絵のついたアイス

の袋だった。

「……………これは？」

『ナニコレ』

受け取った袋をクレープと二人で覗き込む。中を見ると裏面に『あたり』と印字されている箇所を見つけた。

「えへへ。実はですね。学園長室に入った時、五郎の話で盛り上がりまして。学園長が、当たりくじ付きのアイスをくれたんです」

「五郎？」

『最近巷で出回ってる妙なキャラクターの名前。クリオネ五郎っつうんだって。っていうかトランちゃんも知らない仲じゃないデシヨ？ ほら、表のこの絵。トランちゃんのネクタイとか靴下とかについてるヤツと……………』

「ああ……………そうなんだ……………これのこと……………」

トランは、彼にしては珍しく不快な色を露わにした。

グレイプは現在、買出し係と化している。石化製品を扱えない彼女が一人でまともに出来る事と言ったらそれ位しかない。彼女も解っているのか皆が頼む前に進んで買出しに行く。頼まれると喜んで出かけていく。しかし、まともに出来るはずの買出しですら、周囲は一度、恐ろしい被害を被った事がある。

なにせグレイプは何から何まで自分の好きな「五郎」というキャラクターグッズで揃えてしまうのだ。細かく指定せず完全に彼女に任せてしまえば、消耗品は愚か、食器やカーテンなどの生活雑貨からハンカチ、弁当箱、下着やネクタイの柄まで、総てにおいて五郎というキャラクターが支配する事となる。

他の面々はその都度、不満と怒りを露にしブーブー文句を言っっては買い直しを要求するのだが、トランだけは、曰く「せっかくグレ

「プちゃんを買ってきてくれたんだから……」と、そのまま使用していたりする。

その行為をグレープが、トランも自分と同じように五郎が好きなのだと勘違いしてしまっているのが実に痛い。

トランは未だにそれを訂正できずに、グレープが満面の笑顔で差し出す五郎靴下を泣く泣く履いて中央警察署に出勤している。大の大人が履くキャラクターものの靴下。そんな不憫な姿を、この家に住む全員が目に見ている。

（グレープちゃんは何も悪くない。悪くない……っ　悪いのは、元凶は総てあの妙なキャラクターなんだ……！）

トランはこの時初めてキャラクター《てき》の名を知った。苦笑いを浮かべつつその心中には……彼には到底似つかわないドス黒い感情が渦を巻いていたりする。

「なんでも、『おいしいから食べてみて』って生徒達が持ってきたらしいのですが、学園長、冷たいものは歯に沁みるという理由で食べられないのだとか。放課後、学園長室でナカジマ先生と二人で話を聞いて、そういう理由ならと遠慮なく頂いてきたのです。そして……」

「『タダで貰ったそれがなんと当たってしまったってお店でさらにもう一本貰えるんです！』……っ てんでしょう？　てかそれ、当たる確率四十パーセント。比較的当たりやすいわよ。あたしだってこないだ続けて二回も当たったもの。……っ てか。アンタも知ってるでしょう？　当たり前袋あげたんだから」

トランたちの横で話を聞いていたリタルが、大して興味も示さず、淡々と言ったのけた。

裏に『当たり』と書いてあるアイスの袋を、同商品を扱っている

店に持っていくと、同じアイスをもう一本タダで貰う事が出来る。

さらに当たりと書かれた袋を五袋集めて応募するとクリオネ五郎の抱き枕が抽選でプレゼントされる事から、前々からプレゼント目当てでグレープがちよくちよく購入していたのをリタルは知っていた。

「べ、別にあんたのために買ったって訳じゃないわよっ　ただ単に……今日は暑かったから……っ」などと、大して好きでもないアイスクャンディの当たり袋をグレープに差し出した事がある。それが周りに発覚し、散々突かれた苦い思い出が……つい、三日前の事だ。

まあ。集めているアイスを、誰であろう学園長からもらって、しかもそれが当たりだった……と言うのは、確かに運が良いと言えるかもしれない。

が、事態はリタルが考えているような……そんな生易しい事柄ではなかった。

「えへへ。やっぱり当たりやすかったんですね、このアイス。おかげで……ほら。持ちきれないだろうって、お店の人が袋に入れてくれたのですよ」

「……？　持ちきれない……？」

ニコニコと、手にしていたビニール袋の口を広げて見せたグレープ。

「じゃーん」

中を覗いたトラン、クレープ。そして、リタルの目が点になる。紙袋の中身は　当たりくじ付きのアイスで溢れ返っていた。ちなみに、どれも袋口が開いていたりする。

「……グレープ？」

「はい？」

『これ全部、……アンタが当てたの？』

「はい、どうやら当たりやすかったみたいで」

「……………今日一日で？ 本当に？ これだけ全部？ 少なくとも、三十本以上はありそうだけど……………」

「はい。実は最後のアイスも『当たり』だったのですが……………袋一杯になったのでさすがに遠慮しました。でも、当たり袋がこれだけあれば、クリオネ五郎の抱き枕プレゼントに十回は応募出来るのですよ」

『って事は……………連続五十回も当てたってワケ！？』

「……………は？」

それまでうつらうつらと船を漕ぎつつ事の成り行きを傍観していたリチウムが、そこで初めて呻き声にも似た音を吐いて長身を起こした。

「ええ……………そうですけど、でも驚く事はないですよ。リタルさんがおっしゃってたように、このアイス、当たりやすくて……………」

ですよ？ と無邪気な笑顔に話を振られたリタル。こめかみを片手で抑えつつ、努めて冷静に声を吐く。

「……………あのね。グレープ。『当たりやすい』とか『運がいい』とかの次元を越えて……………奇跡の所業よ。そのアイス群は」

「……………はい？」

『トコト……………？』

未だ事態が飲み込めていないのかキョトンとしたグレープの様子を見つつ、クレープが訝しげに呟く。

「確かに、当たり連続五十本つてのは……ちょっと普通じゃねえよな」

グレープに近寄ると、彼女が手にしている袋の口を長い人差し指で引き、中を覗き込みむりチウム。整った顔を不快に歪ませ、再度呻いた。

「学園長のお咎めナシつてのも負けじと妙よ。最初は、なんか怪しい理由でもあるんじゃないかって考えてたけど……」

『……運がいい、ねエ……？』

「う、ん……」

一同に囲まれマジマジと顔を覗き込まれたグレープは慌てて胸の前で両手を振った。

「そ、そんな、みなさんを悩ませるような事では……！ 今日わたし、特別に運がよかったって、ただそれだけですよ……っ みなさんにだって今にきつと、いいことが起こりますよ……！」

後ずさりしながらグレープが言い放った次の瞬間 インターホント、電話のベルが同時に鳴った。

『こんにちはー。宅配便ですけどー。印鑑もらえますかー？』

「あ、はい。ただいま……」

「グレープちゃん、いいよ、俺が行く。グレープちゃんはアイス、冷凍庫に入れてきなよ」

「トランちゃん？ 何か落としたわよ……って」

「ったくなんなのよこんな時に………もしもし？」

直後。事態は一転していた。

慌てて印鑑を取りに走ったグレープは廊下で滑って転倒。助けようとその身体を受け止めたトランは、彼女と密着　偶然にも抱き合う形になる。

そんな、直視していれば発狂してもおかしくない事態を、しかし、クレープが視界に入れる事はなかった。彼女は、リビングを去ったトランが落とした　裏に書かれてある文字から同僚に隠し撮りされたと思われるトランの居眠り写真を拾っては、うっとり眺めていたのだ。（勿論くすねる気、満々である）

リタルがとった電話は、彼女の功績を認め特別賞を贈りたいという某秘密組織からの申し出であり。

届いた荷物は、リチウムが以前「運試し」と称して応募していた、当選枠はたったの一名という、懸賞の……それはそれは高価な品物だった。

間も無くして。それぞれが緩みきった表情でリビングに再集結する。

「……なあ」

「……ああ」

「ひょっとして、あのコの言うとおり、全員に起こったって訳……？」

『……「イイコト」ってヤツ?』

そう。

グレープが言葉を口にした直後。全員が全員。良いメを見たのだ。

『……………』

瞬間。ぐりんとグレープに再注目する一同。

「うわ……はい!？」

細い肩をこれでもかと言う程に飛び上がらせたグレイプ。

「リタル！ 『魔眼』だ！」

「らじゃ！」

リチウムのバリトンを受け、一步前に出たリタル。返事とともに、彼女の手の甲 指貫きグローブに付いている黄緑色の石が発光する。

リタルが所持している二つの禁術封石の内の一つ『魔眼』は、如何なる魔力も視覚で捕らえる事が出来る石だ。

「り、リタルさん……！？」

「……………だまって」

煌々と輝く黄緑の光を右手に従えた状態で、グレイプの姿を改めて見直したリタルは、

「……………」

絶句して。

そのまま、立ち尽くしてしまった。

「……………」

『……………？』

やがて『魔眼』の光が消え その後もしばらくの間は、辛抱強く彼女の言葉を待っていた一同。

「……………どした？」

痺れを切らしたリチウムが代表して、その小さな肩をぐいとゆする。

と、リタルの身体はまるで木の枝のように、直立したまま真後ろにバターンとぶっ倒れてしまった。

「つて、おい!？」

「リタルさん!？」

「い……っ　だ、大丈夫カリタル!」

『ちよつとチビガキ?　どうしたつてのよ』

それぞれが声を上げ、クレープが半透明の細い指で突つつく……と同時に　つまりは、倒れた一瞬後にリタルは覚醒する。

即座に立ち上がって周りをびびらせると、リタルはグレープに向かって発狂した。

「グレープううううう!」

「は、はいい!」

その迫力に怯えて、一瞬で壁際まで下がるグレープ。

「ああああ、あんた!!　い、今から喋んじやないわよ……!？」

「は、はい!」

「だから!　喋るなつつつのおおおおー!!」

「……………っ」

自身の口を慌てて両手で塞ぐと、グレープは全力でコクコクと頷いた。その赤い瞳は涙目で完全に怯えきっている。

『……………ナニゴト?　一体』

「おいリタル。何怒鳴ってんだよ？」

グレープを庇うように二人の間に立ったトラン。非難の声をあげるも……、

「い……………っ」

完全に目の据わった十一歳の少女のその迫力に、グレープ同様、思わず後ずさりしてしまう。

「……………ナニカ……………ナニカ口ヲ塞グモノ……………ソウダ……………トリアエズがむてーぷ……………」

「って、おいリタル。何ブツブツ言ってるんだ？」

「止メナイデリちうむ……………世界ノ存続ノ為ヨ……………」

「……………は？」

怪訝な表情を浮かべるリチウム。

声に彼を振り返り、しばらくその顔を見上げていたリタルはその一瞬で正気に戻ったのか、エメラルドの大きな瞳に普段の強い光を戻した。

「……………リタル？」

「……………今日」

彼女にしてみれば驚く程低く、小さな声だった。

「……………あん？」

「……………グレープの目の前で破損した禁術封石の名前は、ね？
……………『真実の口』……………って、いつの」

リチウムと、それからクレープの表情が、途端、険しいモノになる。

「し、シンジツの……！」

『……くちい？』

トランだけが、訳も解らずポカンと口を開けて彼らの反応を見ていた。

リチウム達の鸚鵡返しに神妙な面持ちで頷くリタル。

「……、……は、あははは。お、俺様は騙されねえぞ？

だっておまえ、全部……レプリカだった……つつてたじゃねえか……」

「……」

引き攣った笑みを浮かべるリチウムに対し、瞳に宿らせた陰を解かないリタル。その表情に、リチウムの顔色がいよいよ蒼白になってゆく。

「……まじ？」

『……』

「……」

「って、なんなんだよ？ おまえら急にどうしたっていうんだ？ 壊れた禁術封石がレプリカじゃなくて『シンジツノクチ』って言う石で……それが一体、なんだって言うんだよ？」

一人 いや、両手で口を塞いだままのグレープと同じく、困惑の表情を浮かべるトラン。

リタルはそちらを見遣ると、

「……百聞は一見にしかずってね」

ツカツカと大股でトラン達に歩み寄った。

「お、おい……………」

「手っ取り早く。見せてあげるわよ」

頬に一筋の汗を流して呟けば、トランの横を素通りするリタル。グレープの前に立った。

「……………」

「グレープ。あたしの言う事を復唱してみて」

困惑顔のまま、それでも頷いてみせるグレープ。リタルはそれを見届けた後、しばらく視線を宙に漂わせると、とある言葉をグレープに囁く。益々眉を潜めるグレープ。さっぱり訳が解らないといった感じだ。

「ほら。早く」

冷徹な声に、それが冗談ではないと悟ると、グレープが……やはり戸惑いながらではあるが、リタルの言葉を復唱する。

「……え、えと……………ふ、『ふとんが吹っ飛んだ』！」

「へ？」と、トランがクビを傾げようとした、その直後。どこからともなく聞こえてきた　いや、響いたその大音量はとにかく凄まじかった。

重く、それでいて柔らかな大柄の何かが、世界中で一斉に、思いっきりジャンプして着地したような、そんな地響き。

それはすぐ近辺　一同が居るリビングに面したりチウムの私室からも聞こえてきた。

「……………」

無言のままリチウムが私室の扉を開けると

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

その惨状を目の前にして、今度こそ例外なく絶句してしまっただ一同。

「『真実の口』っていう名の禁術封石は、ストーンハンターの間はかなり有名よ。それこそ、その名を知らぬ者なんて存在しないっていう、伝説……………」というよりは都市伝説じみた話ね。

どの話も似たり寄ったりなんだけど……………共通しているのが、

『この世界^{フローズ}のどこかに、口にした事ならどんな願い事でも無制限に叶えてくれる石がある』っていう。

不幸だった主人公がそれを手にした直後、望む総てを手に入れてこの世の天国を見たり、はたまた身勝手な主人公の言動一つで簡単に世界が滅びたりと、まあ……………普通に考えたらとても在り得ないよな、如何にも子供が好きそうな夢のあるムカシバナシ……………つて今の今まで思ってたんだけど……………そんなハタ迷惑な石がまさか、本当に実在していたなんて……………夢にも思わなかったわ……………」

「……………つてか、なんで『真実の口』がアイオンなんか飾っているんだ……………」

青ざめた表情のリタルの後ろで、呆然と独り言のように呟くりチウム。

『……ガキどもがオイタして粉々になった禁術封石つてのが「真実の口」つつったわね……？ その現場の目前にグレープが居て。で、今。こうなってるって事は……』

「ええ。事態は恐らく、あなたの想像するとおりよ。クレープ。

……グレープ。あんた大方、責任とらされるハメになるナカGを「きつと、ただの世間話ですよ」なんつつて励ましたり。どこかでキャラクターの抱き枕が欲しい、当たり袋が五十枚もあれば絶対に当たるに違いない……とかなんとか、口にしたんでしょう。……違う？。」

思い当たる節でもあったのか。グレープが赤い瞳を僅かに見開く。そのまま口を開こうとして……慌てて両手で塞いだ。リタルはそれを見届けると、極めて冷静に、努めてゆっくりと、一同に告げる。

「……今、グレープの身体には『真実の口』の粉塵がついてる。グレープの、あらゆる魔石を暴走させてしまっつていう……特殊な体質については全員、知ってのとおりでしょう？

グレープは今、たった一言でこの世界を、天国にも……地獄にだつて塗り替える事が出来るのよ。……いいえ。魔石の魔力を石の破壊に至らしめるまでに暴走させるグレープだもの。そんなことじゃすまないかもしれない。聞いたところによると『真実の口』つていうのは、所持者の言葉を真実にする禁術封石らしいけど……それが粉々になっている上に、所持者はグレープ。話に聞く以上のどんなハタ迷惑な作用がでてもおかしくはない。……もしかしたら、近くに居るあたしたちだって、それは例外じゃない、……かもしれないわよ」

リタルの言葉に、その場に居た全員が青ざめた表情のまま、ゴクリと喉を鳴らすのだった。

3

「……………出てきたみたいね」

いささか疲れた顔で呟くと、ソファから立ち上がって部屋の入口に向き直ったリタル。

あれから。一同は現状把握の為、実験めいた事を繰り返した。どうにかして『真実の口』を無効化できないか。全員で思いつくままに意見を出し合ってみた。

まず。グレープの側で各々、軽く言葉を吐いてみた。

……………が、特に何も起こらない。

「どうやら最悪の事態は間逃れたようだな。都市伝説どおり、グレープの言葉にしか反応しないらしい」

「一先ず、よかった……………」

『はあ……………これでフツーに喋れるわ……………』

「しかし。グレープに関しては、願い事だけじゃなくて、断定言語や希望的な言葉にすら謙虚に反応して、叶えちまうみてえだ」

「……………」

『……………見境がないわね』

「ンじゃ。次よ」

バリアやらシールドやら、魔力を防いだり跳ね返す系統の魔石を次々と発動させ、その魔力でグレープを覆う。

「いいわよグレープ！」

「は、はい！ え、えつと……！ ……ね、猫を被る！！」

にゃあ！

ぼて。

「い……っ」

にゃあ にゃあ！

ぼて。

「む」

トランと、リチウムの頭の上に猫が落ちてきた。

『……これもダメっ』

にゃあ。

半透明の身体をすり抜けて床に着地した猫をクレープがジト目で眺める。

「……んじゃ！！ 最後の手段よ……！！」

子猫を頭の上に乗せたまま、リタルが拳を掲げた。

そして。今に至る。

最後の手段 シャワーを浴びたグレープが、戸を開けておらずと一同の前に現れた。

いつも以上にしっとりとした白肌、濡れた髪。彼女の身から仄か

に漂う甘い香り……その際、若干一名。喉を鳴らした者が居たが、全員から「この非常時に！」と袋叩きにあつた事を明記しておく。

「……それじゃグレープ。試しに何か言ってみてよ」

腕を組んだりタルがグレープを見上げた。

試しにつて、何を言えば。

紙に書いて、掲げるグレープ。

「なんでもいいわよ。……世界滅亡とか、リタルちゃんが禿になるとか、そんなんじゃないかね……！」

グレープは困った顔でしばらく思索していたが、その内何かを思いついたようで、両目を固く瞑って開口した。

「た、棚からポタモチい……！」

「……？　なんか、暗くない………？」

ずどーん……。

次の瞬間。哀れトランは棚から落ちてきた巨大ポタモチの下に沈んだ。

「……トランちゃん……！？　トランちゃん、返事して………！　いやあ！　アタシを残して逝かないで！　とらんちゃあああーん！　！」

ポタモチの下から力なく伸びた一本の腕に縋り、クレープが号泣する。

「……………悲惨ね」

「……………俺様嫌だ……………こんな最期……………」

巨大ボタモチの下敷きとなった、かつての仲間。死に顔すら拝めなかった、世にも間抜けな男の最期に両手を合わせつつ、聳え立つボタモチを見上げ青ざめる一同

「って、こんなんで死んでたまるかああああ!!」

叫び声とともに、トランの禁術封石『炎帝』が発動。瞬間、巨大ボタモチがバーニングする。

「あ。生きてた」

「残念」

『トランちゃん!』

ボタモチ焼失後、香ばしい匂いがたちこめる中で、肩で息をしているトランにクレープが抱きついた。

すみません、トランさん!

「あーいいっていいって……………生きてたし」

「……………冗談抜きで。打ち所が悪けりゃ逝ってたわよ。あんた」

「ぞぞ」

『ってコトは何? シャワーじゃ「真実の口」の粉塵は落しきれなかったってコト?』

絶句してしまったトランの身体に未だくっついていているクレープが、珍しく深刻な表情でリタルを振り返る。

「みたい」

『どうすんのよ……？』

黙りこくってしまった一同。

シャワーでも落ちない『真実の口』の粉塵を、一体どうやって落せばいいのか。

『「全自動人間洗い機」でも造ってあげれば？』

「クレープ、おまえなあ……」

「『真実の口』を完全に落す前に、息がもたなくて死ぬわよクレープ」

「……………」

いつからか。

すすり泣く声が室内に響く。

「グレープちゃん……」

トランが心配そうにグレープを見つめた。

懸命に涙を堪えているグレープ。が、それでも溢れ出た雫が一筋、なだらかな頬を伝うと、堪えきれずにうつむいてしまった。

「……………うう……、またみなさんに迷惑かけてしまって……とても申し訳ない……情けないです……っ」

「……………グレープ」

悔しげな涙声に一同、胸を打たれた。

リタルでさえも、あふれ出てくるその鈴音を止めようとはしない。

「今朝は……とてもよく晴れていて……とても、いい日になるって、そんな予感がしていたのに……まさかこんな事になってしまうなん

て……っ」

ぽたぽたと、絨毯に吸い込まれてゆく、数滴の雫。

「……いっそこれが……夢だったなら……どんなによいか……っ」

チュン……チュンチュン……

「……………」

穏やかな朝の日差しが、窓の外から差し込む。

「……………」

爽やかな風が、室内に流れ込んだ。

「……………」

チュン チュン……

「……………」

「……………」

速やかに身支度を整えた一同が、仏頂面で1号室のリビングに集結する。

テレビから流れる朝のニュース番組。

忙しい時間を、嬉々とした鼻歌がキッチンからこちらへ近づいてくる。

やがて、朝の空気に似つかわしい爽やかな笑顔が静まり返った場へ顔を出した。

「……あ、みなさん。おはようございます！ 今日早いんですね……うあ。リチウムさんまで起きていらっしやるなんて……感激です……っ」

無言の一同の前に、幾つかの朝刊を両手に抱えたエプロン姿のクレープが現れる。

一同の無機質な視線の中、新聞をテーブルの上に並べていく……と。そういえば、と彼女は楽しげに告げた。

「実はわたし、すごく恐い夢を見まして、今日は少し目覚めが悪かったんです。……でも、嫌な夢って人に言えば逆夢になるとも言いますよね。こんなに晴れてるし、今日はなんだか、とてもいい一日になりそうな気がします………！」

『んな訳、あるかああああああああああ！！』
「きゃあああ！」

全員の物凄い剣幕にグレープが飛ばされる。

「グレープ！ あんたねえ………！」

「す、すみませええん！ 出来る事なら夢オチにしたかったんです………！」

「すみません、で済むか……！」

「ったくもおおお！ あんたってコはあああ！」

「……まあ、気持ちは解らなくもないけどね………」

『……ってちよつと待って！』

クレープの大声に、一同の動きがピタッと止まる。

「なんだよ？ クレープ」

『グレープ！ 夢オチよ！ 夢オチ！』

グレープはグレープに飛びつくと、ルビーの瞳を輝かせて目前にある同じ顔を覗き込んだ。

「……………はい？」

『アンタが言ってた通り、さっきまでの事って全部夢ってコトになったのヨね！？』

「は、はい……………そのようです。どうやら時間が今朝まで遡ってるみたいですね……………」

『ってコトはさ！ 今日の昼間の事だって……………！ アンタが「真実の口」の粉を引つ被ったコトも、夢！ ナシって事になったンじゃない！？』

「……………っ」

「……………あ！」

「そうか！」

「グレープちゃん……………！ やったよ……………！！！」

グレープの言葉に全員、輝くような笑顔を浮かべてグレープを見た。

「……………みなさん……………！」

一同の笑顔に囲まれ、グレープは瞳を潤ませる。感激の面持ちで両手を胸の前で組んだ。

「じゃあ……………、じゃあわたし……………もう普通にお話してもいいんですね？ 何を話しても、もう大丈夫なんですね……………！？」

「……………っ」

「……………え……………っと……………どうなの？」

「いや、グレープ。……ちよい待て」

『……念の為、実験しといたほーが……』

途端に青ざめる一同。だが、もはやグレープの勢いは止まらなかった。

「聞いてください！ 実はわたし、さつき朝ごはん作りながら考えていた事があつたんです！ もし事態を知らずにわたしがコンナ事を口にしていたらきつと、謝っても許してもらえなかっただろうなつて。でも、実現したらきつとみなさん可愛らしい事になったと思うんですよ？ あのですね、みなさんが………！」

チュン チュンチュン……

「こんなのあんまりよ！ あんまりだわああああ！！」

「泣くなりタル！ 泣きたいのはおまえだけじゃねえ！！」

エメラルドの瞳をした白っぽいナニカを、青の瞳の白っぽいナニカが諫めた。

「……これって、もしかして………」

『そうよ、トランチャン……アレよ、アレ………』

半透明の白っぽいナニカが、その赤の瞳で床の上の 長い間放置され、解けかかったアイスの袋を指す。

白っぽいナニカが黒い目を瞬かせて見ると、指された袋にはクリオネを模ったすっ呆けた目のキャラクター「クリオネ五郎」が描かれている。

そう。今や彼らは全員、宙を漂う小さな小さなクリオネだった。

「こんな姿でこの先一生を過ごさなきゃならないなんて、絶対にいやああああー!!」

流水の天使と化してしまった四匹は、グレープの周りで必死に漂流を続ける。

懸命に、口々に叫ぶも、当の本人にその小さすぎる声が届く事はない。

目前から仲間達が消えてしまった事を不思議に思ったか、グレープはキョトンとした顔で首を傾げるのみであった。

「……………あれ？」

愛しい仲間達の姿を求めて街中を散々放浪するグレープが、ようやく事態に気づき「総て元通り」と「禁術封石『真実の口』」の存在の消失」の発言を思いつくまで、実に後半日という時間を要するのだった。

合掌。

6・トラン、合流！

あ、駄目だ。

……って思ってしまった。

蒼い、艶やかな髪と

その赤の瞳を目にした

その瞬間に。

1

今からかれこれ……三、四ヶ月位前の話だ。

その日、グノーシス市を回っていた車に緊急無線が入った。

火事の知らせだ。

場所は市の中心に建つアイオン教会内の学園　ここから近い。

83

「学園で火事だなんて……大変ですね」

「いや。あそこに限っては日常茶飯事だ」

サイレンを鳴らし急行する車内で、ニタさんは言った。

ニタさん……助手席に座る浅黒い肌のがっしりした体格の男

ニタバーニ・ゼネラック警視は俺の直属の上司でもあり、恩人でもある。まあ、話せば長くなってしまふ為その辺りの詳細はここでは割愛させてもらうが。

不思議に思っただけで振り返る。ニタさんは前方を向いたまま、……その細いダークブラウンの瞳にはどこか、哀の色を滲ませていた。

「まあ、あそこは特別だからな」

世界的にも有名な大教会、アイオンが運営しているアイオン学園。初等部のグラウンドには今、大勢の生徒達が避難していた。教師や……中には保護者らしき大人もあり、場はごった返している。

一教室内で起こった火災。黒煙を吐き出す窓が見えたがここからでは炎の様子は解らない。

「……………」

密かに、ある力を発動させて感知する。……幸い、まだ火の勢いは弱い。

報告によると校舎内には、シスター見習いと生徒が一人ずつ取り残されているという。

「……………ニタさん、これは」

「……………うむ」

燃え上がる炎は生まれるはずの無い場所で発火したという。音楽室だそうだ。

「消防隊はまだか……………」

ニタさんは苛立った重声を吐いた。到着したのは依然自分達だけで、急行しているという警察組織の所有する消防隊の乗る赤い大型車の姿。そのサイレン音でさえ、未だ聞き取る事は出来ない。

ニタさんの前に立った。

「俺が行って来ます」

こういう場合。大抵の上司は部下の勝手な行動を許さないだろう。何か問題を起こした場合、後に責任を取らされる立場にあるからだ。

だが、ニタさんだけは違う。

「……無理はするなよ」

一言返事で了承してくれるのだ。

毎度のことながら、自分の事をあらゆる意味で信頼してくれている証でもあるこの気持ちの良い言葉に感謝を抱きつつ　コクリと頷くと、昇降口へ走った。

3

靴音が妙に反響する無人の廊下を一人走る。

徐々に煙が濃くなってゆく事からして、どうやらこの道で間違いないようだ。……尤も、炎の気配に向かって走っているのだから間違いないのだ。

学園関係者から聞き出した道順も一応頭に浮かべつつ、他に人の気配はないか、気を研ぎ澄ませながら先を急ぐ。

果たして。辿り着いた音楽室は炎に包まれていた。

視界を奪う黒煙。炎火の海が好き勝手に猛り狂い、形あるもの総てを呑み込んでゆく。

肺を焼く凶悪な熱で満ちた一室に、その服装からシスターと思われる女性が一人、丸く身を屈めている姿を発見した。女性はピクリとも動かない。

意識が無いのか　？

「大丈夫ですか!？」

腕で鼻口を塞ぎ炎を避けながら駆け寄ると幸いにも、シスターはすぐにこちらを振り返った。

視線が合う。

瞬間、俺は、目を疑った。

「……………！」

炎の中で、弱りきったその顔が、記憶の彼方の……………ある女性にそっくりだったのだ。

「君、は……………」

息を呑む。

「……………こを……………」

硬直した思考を動かしたのは女性の発した微かな声だった。

「……………この、子を……………」

「……………え……………」

女性は僅かに身を起こす。と、女性の下に小さな女の子の姿が現れた。意識を失っているようで、ピクリとも動かない。

女の子の手の中で何かが赤く光っている。

女の子が抱えているのは……………、

「……………！」

「この子、自分じゃ止められなくて……………そのまま、気を失って……………」

喋りながら激しく咳き込む女性。

「……わたしでは、この子から魔石を取ってあげることが、できなくて……っ……………!!」

息苦しさに涙を滲ませながら、なおも口を開こうとする女性。すぐに着ていたコートを脱ぐと問答無用でその頭にかける。

「もう喋るな！ わかったから……!!」

それなのに、女性は涙目になりながらも、必死に俺の顔を見上げて言った。

「この子を……たすけてください……っ」

「……………」

「お願い、します……、この子を……助けて……っ」

それから意識を失うまでの僅かな間。女性は幾ら制しても俺に訴え続けた。

零れる弱々しい鈴音は、しかし、自分のことはただの一度も発しなかった。

こんな、生死を左右するような状況下で。

「……………なんて人だ」

ハンカチで女の子の手から光る赤い石を取ると、間もなく石は発光を止めた。確認してからハンカチごとポケットに捻じ込む。

が、炎の勢いはそれだけでは治まらなかった。証拠品である石を壊す訳にもいかない。

「……………」

舌打ちして、懷から赤い石のついた指輪を取り出す。

中指に嵌めると、赤く光る石はシュオオオオオ……と鳴き、すぐに俺の意思に応えてくれた。

自分達の周りで踊り狂っていた炎の大波が、指輪の光を恐れるように音も無く退いてゆく。

そのまま赤光を翳すと正面の炎海がどんどん裂かれて……今、外界へ続く一筋の退出路が生まれた。

4

意識の無い女性を背負って、子供を抱えて。

消防隊の車のサイレンと赤い光の溢れる、騒がしいグラウンドに戻る。

入れ違いに消火部隊が校舎へ走ってゆき、程無くして自分達は救護隊に囲まれた。

女性は直ぐに意識が戻り俺の背から降りたが、子供の方は消耗が激しく、意識の戻らぬまま病院へ搬送される事になった。

車内へ運ばれてゆく子供を心配そうに見送る煤だらけの女性の背で、野次馬　恐らく生徒の保護者だろう　が口々に囁く。

「またあのシスターか……」

「このボヤ騒ぎも彼女なんでしょ？」

「もういい加減にして欲しいわよ」

「あの娘がいなければ、毎回こんな事態にならずに済むだろうに」

「なんで辞めさせないのか」

「死人が出なかったからよかったものの……学園側は一体どう責任をとるつもりか」

周囲の……憎悪にも似た激しい悪意に驚いて目を見開く。
女性はその声を確実に耳にしているはずなのに……その背は一步も動こうとしなかった。

子供を乗せた救護車を、ただ見送っている。

「この学園では、事件が多くてな」

声に振り返る。いつのまにかニタさんが俺の背後に来ていた。

「その大半は彼女の仕業なんだ」

「……………あのコの？」

「彼女は、魔石を暴走させてしまうという特異な体質の持ち主らしい」

「……………ぼうそう？」

「ああ。文字通り『暴走』だ。石化製品の中に入っている魔石を無意識に暴発させては大袈裟な事件を起こしている。尤も、彼女に非はないんだろうが……………」

「……………」

「周りは。放つてはおかないだろうな」

「……………でも、彼女は……………」

今回のこのボヤ騒ぎは、彼女のせいじゃない。

恐らく、子供が魔石で遊んでいて暴発させた……………事故だ。

原因となる魔石は子供が所持していたし。なにより子供の消耗は激しかった。

あれは断じて、火事だけのせいではないだろう。恐らくはその身に不相応な力を持つ魔石を使い、石に精神力を吸われた為

「……………あのー！」

悪意を放ち続ける人盛りに告げようと、一歩前に出た時。
女性は、こちらを振り返った。

「……………」

赤い ルビーを思わせるような澄んだ瞳に……思わず二の句を失う。

煤に汚れた細身。だが……煮え滾る感情を抱く周囲の人間の口を噤ませる程に その姿は儚く、あまりにも美しかった。

蒼い肩までの髪を風に靡かせて……やがて、少女は深々と頭を下げる。

「すみませんでした」

皆が呆然と、彼女の姿を見る。

やがて我に返った周囲が、どんな野次を飛ばそうと……どんな暴言を吐かれようと。

彼女は、たった一人。悪意の波にその身を曝しながらも、微動だにしなかった。

「すみませんでした」

ただ、繰り返す。

「……………」

……よく見てみれば、その細い肩は……震えていて。

消耗して 恐らく今、立っているだけでもやっとなはずの彼女は、ずっと、頭を下げ続けていた。

「違います！」

いても立つてもいられずに、彼らの前に躍り出る。

「違うんです！ 彼女は……、」

彼女はただ、必死に子供を守っていたただけだ。

彼女は何も悪くない……！

そう、叫ぼうとした。

背後から上着を引っ張られる。

「……………」

振り返れば、彼女の細面が 目前にあり、

その可憐な瞳に見つめられて、しばらく思考が止まる。

「……………あ……………」

彼女はそんな俺に、ただ、ふるふると首を懸命に横に降るのだった。

「……………きみは……………」

子供を、庇うつもりなのか…………？

俺が黙るのを見届けると、彼女は再び周りの人間に向き直り、頭を下げる。

「すみませんでした」

俺が前に出た事で鎮火したかのように見えた悪意の炎が再び燃え上がる。

震える全身が、ただ、印象的だった。

5

グレイプ・コンセプト。

報告書でその名前を目にした。それがあのコの名らしい。

「……グレイプ、ちゃん、か」

搬送された病院で意識を取り戻した女の子が事情を話した事から彼女の疑いはようやく晴れたそうだ。辞表を書かせられる事もなく、そのまま謹慎処分となった。

そして。昨日でその謹慎も解けたらしい。

単なる世間話か、意図してか。度々ニタさんが俺に話を持ってきてくれた。

その日の空き時間。俺が様子を見に学園を訪れてみると、彼女は既に以前通りシスター見習いとして学園で笑っていた。

帰宅する為に門をくぐった彼女の後姿を、俺は呼び止めた。

「お疲れ様です。コンセプトさん」

「……………？」

彼女はゆっくりと振り返ると、あの赤い瞳で俺の顔を見上げて

「トランさん……………」

それから、柔らかく微笑んだ。

「……………」

その笑顔は……なんというか。
とても、尊い……そんな風に感じて。

まるで子供の頃。自分だけの大切な　タカラモノを見つけた時のように、
胸が高鳴った。

「……………」

「……えと……トランさん、でしたよね？　お名前……。……ひよっとしてわたし、間違えてしまいましたか！？」

完全フリーズしてしまった頭を、慌てふためく鈴の音が覚醒させる。

「……！！　いや！　うん、大丈夫！　俺、トラン……。……って、その……。……どうして俺の……。……僕の名前を？」

「この前一緒にいらした……。……色の黒い警察屋さんが教えてくださいました。トランさんは、お名前でお呼びした方が喜ぶって……。……」

ニタさん……。……！

絶句していた俺の顔色に気づいた様子もなく、彼女は深々と頭を下げた。

「……この前は本当に。ありがとうございました」

あの時のように。

6

今日は『たまたま』近くまで来たついでに学園に寄った事を説明した後。

ついでだから、このまま家まで送らせてもらえないだろうかと思し出ると、彼女は最初こそ全力で遠慮していたものの、最後には折れてくれて。

申し訳なさそうに……だが、嬉しそうに。また微笑んでくれた。

「……………」

彼女の靴音を後ろに聞きつつ、一瞬前の自分を振り返る。

……しかし。なんだって俺はあんなに必死に……遠慮する彼女に、……せがんでしまったのだろう。

あれじゃあ完全に『ウザイ人』だ。

自分でも首を傾げつつ、車に乗り込もうとしたが、それを彼女に止められた。

「…………？ どうしたの？」

「……………あの、すみません。わたし……乗れないんです……。車……………」

彼女にそう言われて「あ」と世にも間抜けな声をあげてしまう。

そうだ。車も立派な石化製品だ！ すっかり失念してしまっていた。

っていうか……！ あんなにしつこく頼み込んで額かせた『ウザイ人』のくせしやがって、何、彼女にこんなすまなさそうな顔をさ

せてやがんだ俺！？

困らせてどうすんだ！ てかそもそも、一体何がしたいんだ、この『ウザイ人』がああああ……！！

「……トラン、さん？」

「……え？ あ、あははは……なんでもないよ……」

頭の中で自身を百万回蹴り倒しつつ、車はそのままこの場に駐車させてもらって。

二人、並んで彼女の帰路を歩く。

「……………」

チラリと何うと、幸い彼女は先程の車の件を気にしている様子も無く、浮かべていたそれは見惚れるほどに穏やかな笑顔だった。

「……………」

「どうか、されましたか？」

「い、いやなんでも！？ ってか。な、何見てたのかな……とか……………」

「……あ、えと、ですね。さっきそこで猫さんが……」

ってな具合に。

会話は恐ろしくぎこちなくて。

というか、情けない事に何故か上手く話せなくて。ひよっとして彼女は退屈してんじゃないだらーか、とか。常に大量の汗をだらだらと流していたのだが……………それでもどこ不思議な……充実感みたいなものがあつた。

同時に異様なまでの高揚感と、幾許かの緊張。

それが何であるのか。その時はまだ、解らなかった。

やがて、彼女が足を止めたのは、昔ながらの住宅街に建つ十一階建ての古マンションの前だった。

聳え立つマンションを見上げる。

……一人暮らし、には、広過ぎるのではないだろうか。このマンションは。

訊いてみると、案の定彼女には同居人が居るという。

お茶をご馳走するからと、言われるがままに彼女の部屋へ上がった俺は……なんということか。

そこで今自分が追っている禁術封石強盗なる輩と、ばったり出くわしてしまった。

「……………」

一体……誰が想像出来ただろう。

知り合ったばかりの……こんなにかわいらしい女の子の家のリビングで、誰であろう、リチウム・フォルツェンドがソファに踏ん反りがえって寝ている姿……なんて。

今度こそ、全身完全にフリーズしてしまう。

「……トラン、さん？」

キョトンとした顔で俺を振り返る少女。

「……………」コン……………セプト。さん……………」

「はい？」

「……………」住んでるの？」

「？」

「……………」あいつと……………」一緒に!？」

「？ えと……はい」

顔が強張った。

彼女の一言で、目の前が真っ暗になる。

（うわああああああああ……！）

ガラガラと崩れてゆく崖の先端。奈落の底に沈みゆく俺の精神

愕然と立ちすくむ、そんな様子を彼女は不思議そうに見上げて、付け加えた。

住む所が無くなってしまつて、数日前から奴の家に世話になつているという。

深い闇からなんとか這い上がってきた俺の両手が彼女の両肩をがしいと掴んだ。

「うあ、はい……！？」

「そ、それは止めといた方がいいよ！ コンセプトさん！ すぐにすうぐうにつ この家を出て行こう！ いますぐ……！」

「……はい。ご迷惑をおかけしている事は重々承知しているのですが」

「じゃなくて！ コンセプトさん！ こんなトコに居ちゃいけない！ 知らないのかもしれないけどあそこで踏ん反りがえってるあの男は……！」

と、いきなり後頭部にものすごく硬いものがスコンと直撃する。

「……い……っ……！」

視界で火花が散った。

直後、足元に落ちたそれは……テレビのリモコンだった。

「……………うるせえ」

声に振り返ると、後ろのソファで踏ん反りがえって寝ていたリチウム・フォルツェンドが起き上がっていた。

整った眉目が、寝起きの今は不機嫌全開に歪みきっている。

「リチウム・フォルツェンド……！」

痛みを堪えて向き直る。

と、リチウム・フォルツェンドは耳の穴を小指でかきながら、面倒臭そうにぼやいた。

「……………って、おまえ、阿呆刑事じゃないか。何でここに？ ……ポカミスやらかしてついに清掃業者にでも転職したか？」

「縁起でもない事ぬかすな！」

「ってか。ここで会ったが百年目！ リチウム・フォルツェンド！
今ここで俺がおまえを逮捕……！」

「精々、一・二年前だろ？ おまえがグノーシスに来たのは」

「う、うるさい！ とにかく……！！！」

「ったくもおお！ なんの騒ぎよ……一体！ おちおち研究してらんないじゃないの！」

そこで、ボタンと廊下に面していた扉が開き、一際甲高い声が場を裂いた。

声に目を見開いて振り返る。

と……、

「…………リタル」

俺がその名を呟くと、黄緑色の髪を揺らして、まだ幼い顔立ちの少女が呻いた。

「げ。……阿呆刑事」

「……って、おまえもか」

露骨に顔を歪める少女に、聊か傷つきながらも改めてその姿を視界に収めた。

小さな背丈。大きなどんぐり眼は少し垂れていて愛嬌がある。その色はエメラルド。吸い込まれそうな程綺麗なそれは……本当にそっくりだった。

「……みなさん、お知り合いですか？」

グレープちゃんが三すくみの様子を伺いながら戸惑いの声を上げた。

「って、あんたの仕業ね、グレープ！ 他所の人をこの家に上げちゃいけないってあれ程……！」

「す、すみません、リタルさん！ で、ですがこの方は先日話した恩人さんでいらっしゃいますから、あの……っ」

グレープちゃんの言葉に、リチウムとリタルの顔が瞬時に真顔シリアスになる。

「……先日話したつつつと……アレか？ 火事ン中おまえら抱えて生還したつつつ……」

「はい」

「……へえ。あんただったの阿呆刑事。……どおりで」
「……な、なんだよ……!？」

二人の様子の変化 自身に突き刺さる視線に、思わず声が上ずってしまふ。

「……………手っ取り早いっつってんだよ」

リチウムは口端を吊り上げた。その顔は邪悪に歪んでいる。

「はあ?!」

じりじりと、異様な迫力とともに前後から迫るリチウムとリタル。

「あの……?」

「あんたは黙ってなさい!

……さて、阿呆刑事。無傷でお家に帰りたかったら、出すもの出してもらいましょうか?」

こちらも負けじと邪悪な笑みを浮かべつつ、俺との距離を徐々に狭めるリタル。

「……出すものって、一体何を……」

黒いオーラを身に纏った双方に気を配りつつ、身構えながら壁際に後退する。

「何をつて……決まってんじゃないか」

「あんたが持つてる、ほのお……………」

その時だった。

『かわいいーじゃない！ このコ！』

突然。大きなメゾソプラノが耳を劈く。

吃驚して周囲に視線を巡らせ……るまでもなく。

それを発した人物は、 本当に唐突に、姿を見せた。

自分の……超間近に。

『黒目がくりくりしてる！ やだ、本当にかわいいー！』

長い金髪の女体が空から降って来たかと思えば……身体に抱きついてくるじゃないか！？

「つて、な、なんだ……！？」

慌てて引つpegがそうとその肩に手を置いた。

……いや、置こうとした。

しかし両手は何も掴めない。スカスカと通り抜けてしまう。

っていうか、感触が……無くないか……？

「 え？ ええ！？ 」

そういえば、彼女に頭から抱きつかれて視界を遮られているというのに……リチウム達の姿が見える……？

『随分愛嬌ある顔してンじゃない、アンタ。名前なんていうの！？』

不審に思って、見上げた少女の顔は……、

「コンセプトさん!？」

思わず叫んでしまう。

彼女の顔は……グレープちゃんそっくりだったのだ。

ルビーを思わせる赤い瞳。形のよい細顎。華奢な身体。

しかも……どういう訳か、身体が透けてる。

って事は……この女の子は……ゆうれい？ え？

思わず一番遠くに立っているグレープちゃんと、半透明の女の子を見比べてしまう。

「はい？」

『失礼ね。あんなドン臭くて地味なコと一緒にしないでよ!』

俺に呼ばれてキョトンと返事をするグレープちゃんと、途端に不快な顔付きになる半透明の女性。

……幽霊にしては、元気が良すぎる。……気が、する。

「ちょっと邪魔しないでよクレープ!」

「俺様等。ソイツに用があんだが」

「クレープ……プ？」

グレープ、じゃなくて？

ってか。普通に会話してる……？

リタル達の声にもう一度見上げれば、抱きついてはいるものの、彼女はすでに俺を見ていなかった。

『ダメよ。このコ、アタシがもらっわ』

『……はあ!？』

三人の声が見事にハモる。関せずクレープと呼ばれた半透明の少

女は、ようやくその場に降り立ったかと思えば、今度は俺の顔をぺたぺたと無遠慮に触りまくった。……いや、その感触はないのだが。

『ね、アタシと一緒に住みまシヨ？　ちゃんと毎日散歩に連れてつてあげるわ』

「……犬じゃ、ないんだけど。つてか、キミ、一体何者……」

「何言つてんのよクレープ！　そんな勝手はあたしが……！」

『……ヘエ？　アタシにそんな口聞くんた。アンタ。このあいだは一体誰が、サツの魔の手からアンタを救ってやったと思つてんの？　……ぐ』

「てかクレープ。ソイツ。そんなんでも立派にサツだから。そんなま居座られると逮捕されちまうから。俺様等」

『へ？』

クレープはまん丸に見開いた赤い瞳で、俺を見上げた。

『サツ、なの？　アンタ』

「……………」

無言で懷から黒皮の手帳を取り出してやる。

『トラン・クイロ……』

呆然と、書いてある名前を読み上げるクレープ。

……まあ、会話は出来るようだし……今は細かい事は放っておく事にする。でないと………なんか混乱して頭がどうにかなくなってしまいそうだ。

「え、えっと……クレープ、でいいのか？

……これで解ったと思うけど。そいつらが言うように正真正銘、

刑事なの、俺は。

だから、リタルはともかく」

「……てか。さっきから思ってたんだけど、なんであたしの名前知ってんのよ。阿呆刑事が」

冷やかな視線が横から突き刺さるのを感じつつ、手帳を懐にしまう。

「……企業秘密ってやつだ……っ　とにかく！

リタルはともかく、リチウム・フォルツェンドは今ここで、逮捕させてもら……っ」

『トランちゃんって言うのね！　名前までかわいいー！！』
「……う……！？」

黄色い声を上げられ、再び身体を撫でまくられる。

「……えっと、だな……」

『首輪は赤で決定ね！　黒い毛に映えると思うの』

「……犬じゃ、ないんだけどね……」

『怯えなくても大丈夫よ。ワルイ奴はこのアタシが全員追っ払ってあげるから』

そこまで言うと、クレープはリチウム達に悠然と向き直った。

『……さて。これ以上アタシとトランちゃんの薔薇色生活を邪魔しようってんなら。ここで倒れてもらっわよアンタ達』

「クレープさん！？」

「って、おまえな……」

妙な迫力を滲ませつつ、両腕を組んでやたら偉そうにふんぞり返

るクレープをジト目で睨むリチウム。

「サツだから。ソイツ。刑事だから。敵だから。間違いなく」

『テキな訳ないデシヨ。このコは今からアタシのものなんだから。明日には早速赤い首輪つけンだからね』

「……………いやその……………だからね？」

『とにかく、トランちゃんに手を出したら承知しない……………ってか。今後一切、アンタ達には力貸さないわよ』

「そんなメチャクチャがまかり通ると……………」

『思ってる』

「……………たくもおおおー!!」

地団駄を踏んだリタルが、リチウムの背後に回り込むや否や、ずいといと奴を前に押し出し、俺と対面させる。

「家主はリチウムよ！ ペット一匹飼うにしたって居候のあんたに決定権はないの！ わかる!？」

「……………おまえな」

正面にいるリチウムが目を細めて後ろに居るリタルを見下ろす。

『なによ！ アタシのことはアタシが決めるわ！ てか、そっちのリチウムなんかより、コッチのトランちゃんの方が断然愛嬌あるんだから!』

「なにをああおおー！ リチウムだってね、普段はこんなんでも真面目な顔すればちつとは見れるようになるんだから!」

『真面目な顔すれば。デシヨ？ シツケの悪いリチウムなんかと違ってね！ コッチのトランちゃんは四六時中かわいらしいのよ!』

「むっ きれいい!」

「……………あの、さあ……………」

「……何自慢だ？　これは」

こちらの戦意喪失を他所に徐々にヒートアップしてゆく二人の女の対決。激しい口論は永遠に続く……かのように、思われた。

「……やめてくださあああああああいー！」

戦場に、少女の清らかな　耳を劈く鈴の音……もとい、超音波が木霊した。

『……うわっ』

「きゃ……っ」

「な、なんだ……！？」

あまりの音害に、全員が堪らず耳を塞ぐ。

見れば、ふるふると身体を震わせながら、真っ赤な顔をしたグレープちゃんが「うー」などと唸りながら仁王立ちしていた。

やがてトコトコトリチウムと自分の前にやってくると、潤ませた赤い瞳がそれぞれを貫く。

「い……？」

直後、限界まで大きく息を吸い込んでから、

「グレープ……？　……やめ……！」

彼女は……恐らく、自身が持つ最大級の殺人音波を放った。

「みなさん！」

仲良くしてくださあああああああああああい……

……!!」

7

果たして。俺はこの面子と共に暮らす事になってしまった。

逮捕しようとするれば、グレープちゃんが瞳を潤ませ、

元居た寮に帰ろうとするれば、クレープが烈火のごとく怒るのだ。

困り果てた俺に、リタルが同情視線を寄こすと、溜息混じりに吐いた。

「……あんたも災難ね。阿呆刑事」

うんうん頷いては、腰をぽんぽんと叩いてくる。

「……………トランだ」

まあ元々、俺がりチウム逮捕に燃えていたのは、この少女を保護する為でもあった。目的はすでに達せられたのだ。

……とはいえ……コイツラは捕まえるべき禁術封石強盗でもあり……そいつらと現役の刑事が一緒に住んでるってのはどうよ……って。仕事に赴く度、同僚や先輩と顔を合わせる度になけなしの良心が疼くのだだけでも……。

大体、こんなの見つかれば退職だって免れないだろう。

「トランさん、リタルさんっ お茶が入りましたよ」

「あ、ありがとうグレープちゃん！」

……せめて、持ち上がっている出世話は断ろう。うん。

「……てかさ。今さらなんだけど。なんで『阿呆刑事』？」

「決まってるでしょう？ あんたが物の価値をあまりにも理解してないからよ」

「？」

「こつちの話。知らなくていいわよ。あんたがこつち側に付くつもりなら、もう取り上げようなんてしないから。……あんたに手を出そうもんならどこからともなく現れたクレープが恐ろしい程ギャンギャンと騒ぐだけだし。相当気に入られたみたいね。あんた。

それより……」

ソファに腰掛けたリタルは湯気立つカップを両手で持ったまま俺を見上げると、いやゝあな含み笑いを漏らす。

「……随つ分、似合うじゃねえか。トランチャン」

背後から忍び寄ってきた寝起きのリチウムが肩を組んでくる。

「！ べ、別に俺は好きでつけてる訳じゃあ……！！

つて、言つとくがリチウム！ 俺はまだ、おまえの逮捕を諦めたわけじゃないんだぞ！ 見てろ！？ 今に寝首かいて……！！」

「大型犬用の赤い首輪がよく映える男に言われたくねえ」

「おおまえなあああ……！！」

「本当に。よくお似合いです……！ トランさん」

「……………クレープ、ちゃんまで……」

……………合掌。

7・CC団のラプリー魔石講座そのいち「属性って、なあに？」

キュアキュア団、参上！

キュアストーンブラック（以下、ブラック）「不埒な行いは絶対に許せない！」

キュアストーンゴールド（以下、ゴールド）『乙女の純情を踏み躪る愚かな男は絶対^{ホウヤ}に許さなあい！』

ブラック「わたしたちは美少女仕置き人！」

ブラック「キュアストーンブラック！」

ゴールド『キュアストーン、ゴールド！』

キュアストーンホワイト（以下、ホワイト）「……えっと、あの……キュアストーン、ほわいとです……」

ブラック「甲斐性なしには愛の鞭を！」

ゴールド『すぎやんと改心、させたげるかんね！』

ビシ！

ゴールド『……ふ……』

ブラック「今日もばっちり華麗に決まったわね……」

トラン 「ぐー…… すかー……」

リチウム「くぴー……むにゃむにゃ………」

ホワイト「あのー……、お二人とも、お昼寝街道驀進中、みたいで
すけど……」

ブラック「……ムキヤ。人が折角決めポーズ決めたのに……っ
セ
リフとポーズ決めるだけで一体何時間打ち合わせしたと思ってるの
……っ

くキュアブラックううー……怒りのロケットパーあんち、二連
発！」

トラン 「ふぬ！？」

リチウム「ぐー！！？」

トラン 「？ あ、あれ……何……カメラ？ 照明？ ……いつの
まにか……何か始まつちゃってる……？」

ゴールド『……よーやくお目覚めのよーね』

トラン 「あ、ああ？！ キミ達は確か……キュアキュア団！」

リチウム「いってて……トラン……、いきなり何……しやがる
う、

……ぐー……」

ホワイト「そうです。キュアキュア団っ 今し方参上しましたー」

トラン「か、かわいい……って……あれ？ ホワイトって確か……金髪ツインテールじゃなかったっけ？ ていうか……キミ達確か二人組じゃあなかったっけ？」

ゴールド『都合により、今日は三人組。可憐で綺麗で麗しい金髪ツインテールは今日はゴールドちゃんが登場ヨ。ってか。細かい事は気にしないの』

トラン「あつれ……キミは半透明？ ……ん、なんだかクレープみたいだな……」

ゴールド『そ、そんなことないわヨー。可憐で綺麗で麗しいクレープちゃんは、つい今し方出て行つたワヨ、ヲホホホホー！』

ブラック「……あんたね」

トラン「そうなんだ。って事は他のみんなも一緒なのかな。しかし、グレープちゃんまで黙って出て行くなんて……一体どこへ行つたんだろう」

ホワイト「しっかり納得されてます」

ブラック「……ここまで気づかれないつつもの………逆に
おちよくられてる気がして不快だわ……」

トラン「で？ キュアキュア団。キミ達、今日は一体何の用なんだい？ 人ん家のリビングにまで押しかけてきて………って。まさかまたこのあいだみたいにオシオキだつていうの……！？」

リチウム「ぐー……ぐー……」

ブラック「違うわよ。今日は、常日頃から不甲斐無さ爆発なあんたたちの為に、忙しい身でありながらもこうしてわざわざ出張講師として参上してあげたの」

トラン「しゅっちょーこっしい?！」

リチウム「……ぐう……むにゃむにゃ……」

ゴールド『そうヨ。……って、トランちゃん、怯えるって事は！何かヤマシー事でもあるっていつの……!?!』

トラン「わー!! 無い! 無い! ちっとも無い! 暴力反対
ー!!」

ホワイト「クレー……じゃなかった。ゴールドさん、トランさんが怯えています」

ブラック「そーよ。ただでさえ時間押してるのに、話が進まないじゃない。

てな訳で、さくさく行くわよ! 『美少女戦士CC団のラブリー魔石講座!』」

トラン「らぶリー魔石講座あ?！」

リチウム「……んご……? な、なんだ?」

ホワイト「そのいち」

ゴールド『「属性って、なあに?」』

『魔石』ってどんなもの？

ブラック「あたしたちの居る世界フロースには、空間は違えど大きく分けて三種類の種族が生きているの」

ホワイト「人間、天使……それに魔族ですね」

ブラック「その内、魔力を持っているのは、天使と、魔族だけ。

彼らは、死ぬと肉体が消失してしまう。

けど消失寸前、彼らの魔力だけは、何故か結晶化して世界に残るの。

この結晶化した魔力の事を『魔石』、もしくは『天石』と言う。
しいて言うなら『魔石』や『天石』ってのは、持ち主を失くした野良魔力つてところね。

……で。

その中でも極めて危険度が高い石の事を『禁術封石』と呼んで他の石たちと区別している。『禁術封石』に指定されている石は、本来人間は持つてはいけない事になってるわね」

ホワイト「でも、魔力を持たない人間わたしたちには、魔力を扱う適性だけは備わっていますー」

ブラック「その適性の事を『属性』と言って。わたしたち人間は多種ある魔力いしの中でも、己と属性を同じとする魔力いしだけを扱う事ができる、と。こういう訳なんだけど……。

……って。あんたたち、聞いてる？」

トラン 「『聞いてる?』って言われても……」

リチウム「さっぱり訳がわからんな。そもそも、どうしておまえらが俺様の家に……」

ブラック「ストップ。それはさっき聞いたから、別の質問にして。読者さんたちが飽きちゃうじゃない」

ゴールド『……は……メンド……』

ブラック「……………それでもこっちのバカ幽霊ゴールドは既に飽きてすっかり昼寝体勢だし」

ホワイト「ご、ゴールドさん……」

リチウム「ンじゃ、なんで俺様達が、貴様等のご高説を大人しく聞かにならんのだ」

ブラック「そういう設定だからよ。文句があるなら作者をふん捕まえなさい」

リチウム「どーも腑に落ちんよなあ……」

トラン 「無理やり乗せられて急発進、な感じが否めないんだよなあ……」

ホワイト「とにかく、今日の主旨は、これを機にみなさんに魔力の属性の種類を把握してもらおうと、これこつという訳なんです」

リチウム&トラン&ゴールド『はあ………』

ブラック「そこ！ 声を揃えて溜息混じりに返事しない！

って、ゴールドまで一緒になって……何やってんのよあんたは」

ゴールド『何って……一応顔出しとかないと、ギャラ貰い辛くなっちゃうデシヨ。』

ほらアタシ、どこぞの影薄主人公なんかと違って神経細やかで繊細な造りしてンから。さすがに寝てばかりってのはチョット……』

ブラック「……人が仕事してる間、偉そうに傍聴席で踏ん反りがえってたかと思えばギャラ貰う気満々だったとは……」

ゴールド『出演料よ出演料！ アタシは高いの！』

トラン「このノリ。……このコ達やっぱり」

リチウム「どうかで見た事あるような……」

ホワイト「そ、そんなことないですよ……っ　ね、ねえ、ブラックさん！」

ブラック「そ、そうよっ　ホワイトの言う通りよ！　という訳で！」

リチウム「どついう訳なんだ？」

ブラック「属性は全部で六つ！　とつとと覚えちゃいましょー」

教えて、ブラック先生！

ブラック「まず、本編でよく耳にするのが、みんなのアイドル天使、天才リタルちゃんの属性である『空間操作』ね」

ブラックを除く全員『アイドル天使い？』

ブラック「アイドル天使よ！　なんか文句ある！？」

トラン「うあ！　な、ないない！　ないです！」

リチウム「無いからそのロケットパンチ銃を今すぐ引っ込めろ！」

ゴールド『「空間操作」って、その名の通り、空間を操作する魔力の事デシヨ？』

ブラック「そうよ。『転位』や『魔眼』の他にも……『ロック』とか。

このあいだの……長編2で、鷹の魔族が使ってた『空間接続』や、『魔力の流れを止める石』なんかもこの属性ね。

要するに、空間そのものに手を加えたり干渉したり、解析なんかが出来ちゃう魔力がこの部類」

トラン「確か……石の色でも判るんだっけ？　魔力属性って」

ブラック「ええ。トランにしちゃ物覚えいいわね」

トラン「前にリタルって女の子から……って、キミも彼女の事を知ってる風だけど……聞いた事があるんだよ。えっと……空間接続の属性の石は確か……」

ホワイト「緑色系です」

ブラック「証拠に、アイドル天使天才リタルちゃんの持っているス
ンバらしい魔石は黄緑色と、エメラルド。どちらも緑色で覚えやす
いでしょう？」

トラン「そうそう、緑だった。あゝ……確かに身近に居る人で考
えると覚えやすいかも。

えっと。他の属性の石も、色が決まってるんだよね？」

ブラック「勿論。例えば、あんたが持つてる『炎帝』だって……」

トラン「ぎょ！？ キミ、どうして俺が『炎帝』持つてるって知
ってるんだ！？」

ブラック「……あ」

ゴールド「決まってるデショ、トランちゃん。あのガキはね……」

ブラック「しゃらーっぶゴールドー！

えっと……企業秘密よ企業秘密！ てか。あんたはさっきからい
ちいち細かい事言ってるの、男でしょ！」

トラン「いや、けどさあ……出してもいないのに……なあ？」

リチウム「目で看破するとは……侮れん奴等だ……」

ホワイト「あは、あはははは……」

ブラック「とにかく！ 『炎帝』を初め、四大元素を操る事を可能

とする属性を『^{エレメンタル}精霊』っていうの。

四大元素っていうのは……勿論、知ってるわよね？」

リチウム&トラン『わかりませーん』

ブラック「……あんたらは。

つか。どーして一端のストーンハンターであるリチウムが知らないのー！」

リチウム「どーしてって言われたってなあ？ 俺様基本自分の事しか興味ねえもん」

ホワイト「あの……わたしもわからないんですけど……」

ブラック「ホワイト……おまえもか……」

ゴールド『苦勞すんわねー アイドル天使、天才ブラックちゃん？』

ブラック「っさいわねー！

ったく………まあ、いいわ……。あんたらにいちいち説明すんの、もう慣れちゃってるし……」

ゴールド『どこことなーく所帯染みちゃってんわねー。まだ若いのに。苦勞性のオンナって老けるの早いって聞くわよー？』

ブラック「…誰のせいだと……っ」

精霊占いで占ってみよう！

ブラック「四大元素っていうのは、
火、大地、大気、水。

この四つの事。

四大元素には、それぞれの力の象徴として四大幻獣なる精霊^{もの}もいると考えられていて……」

トラン「ああ。なんか聞いた事あるぞ。よく占いとかに出てくるヤツだよな……確か」

ブラック「そう、それよそれ！……なんだ、ちゃんと知ってんじゃないの」

リチウム「占いだあ？」

ゴールド『それはアタシ、初耳だわ』

トラン「んー俺も詳しくは知らないんだけど……」

ホワイト「えつとですね……。トランさんの言う占いっていうのは、正式名を『精霊占い』といいまして、よく雑誌裏や新聞紙に載っている、占いの知識が無い人でも簡単に求められるように簡略化された、この世界で最もポピュラーな占いの事です。

誕生日やら出身地やらを用いて計算式に当てはめて……、

『火の幻獣フェニックス』

『地の幻獣ベヘモト』

『風の幻獣ジズ』

『水の幻獣リヴァイアサン』

……という四つのタイプに分けて、性格や相性、運氣などを占うものです」

ブラック「うんうん……ちゃんと解ってるじゃない。それに幻獣名まで……。あんたにしちゃ上出来よ、ホワイト」

ホワイト「えへへ。新聞紙こまに載ってたんです」

ブラック「あ、そう……やけに流暢に語ったと思ったら……読み上げてただけなのね……がつくり」

ゴールド『へエ。そんなのあるんだ……おもしろそーじゃない。ドレドレ……？』

リチウム「誕生日か……はて。俺様……何月生まれだったか……」

トラン「女の子って……好きだよな……こういうの」

ゴールド『トランちゃんは……多分フェニックスタイプね。性格がそのままだから』

トラン「フェニックス……火の幻獣か。……あ、『炎帝』が使えるのも実はそのせいだったりして……」

ブラック「一概にそうとは言いつけない部分もあるらしいけどね。基本『エレメンタル精霊属性』と精霊占いの結果は等しい事が多いみたいよ」

トラン「そうなんだ。……それで？ ゴールド。俺の性格って？」

ゴールド『えっと……「情熱熱血世にも解り易い単細胞生物。考えるよりも先に手を伸ばす」』

トラン 「がくつ な、なんだよそれは……本当にそれ、俺そのものの？」

ブラック 「恐ろしい程あつてるじゃない」

ゴールド 『リチウムは……「ジス」だと思う。多分』

リチウム 「ほう？ して、その根拠は？」

ゴールド 『勿論、性格がそのままだからよ。「気まぐれマイペース見渡せば大顰蹙の嵐」。んで、トランちゃんと思われる「フェニックス」タイプと相性悪いんだって』

リチウム 「……………俺様気まぐれかあ……………」

ブラック 「なにガツカリしてんのよ。まんまでしょーが」

トラン 「うんうん。やっぱり俺達って相性悪かったんだな、納得」

ブラック 「てか。ゴールドもその『ジス』タイプなんじゃないの？」

ゴールド 『そんなバカな！ アタシがトランちゃんと相性悪いハズが無いデシヨ！？』

ホワイト 「まあまあ。ただの占いですし」

トラン 「……………やっぱり似てるよなあ……………」

ホワイト 「ちなみに、ブラックさんは『リヴァイアサン』タイプで、わたしは『ベヘモス』タイプ（疑）だそうです」

トラン「なにになに……？ 『リヴァイアサン』タイプは……寂しがりで群れを成し情に流れてゆく。喜怒哀楽爆弾。

で、『ベヒモス』タイプは……大らか温厚ボケ担当。八方美人で大食漢多し……だって」

リチウム「てか。なんだその（疑）ってのは」

ホワイト「えとその……えへへ」

ブラック「まあ、その……ただの占いだし」

長編の敵を振り返ってみよう！

ブラック「はいはいちゅーもく！ 放っておけばすっかり脱線しちゃってるんだから」

ゴールド『アンタもしっかり食いついてたじゃないの』

ブラック「で、『^{エレメンタル}精霊属性』なんだけど。石の色は操る四大元素で違ってるの。

火の魔力を操る石は赤。

大地は茶色。

大気は水色。

水は、青ね」

トラン「そういえば。長編2で倒した犬頭達の魔石もそれぞれそんな色してたっけか……」

ゴールド『補足。治癒の類の魔力も「エレメンタル精霊属性」に多いみたいよ』

ブラック「次。黄色系の石は『傀儡属性』と言って。人間、犬、猫……のような、生体に直接干渉、操ったり出来る魔力がこの属性なの。

身近で言えば、ファーレンの持つてる魔力がまんまこれね。他にも『魅了』とか」

リチウム「ファーレンの魔力といえば……名前がそのまま『傀儡』だった気がするが」

トラン「はいはい、質問ー」

ブラック「なによトラン」

トラン「やっぱり長編2の話なんだけど。あの話に登場した、狼の魔族の魔力属性も『傀儡属性』になる？」

ブラック「ああ……『分心』ね。アレは違うわ」

リチウム「違うのか？」

ホワイト「でも……人を操ってましたよね？ 現にリタルさん、リチウムさんを撃ち殺そうとしていましたし……」

トラン「そ、そうなの！？ ホワイトちゃん」

ホワイト「はい。現場を、この目で確しかと」

リチウム「そうなんだよな。俺様あの時リタルの銃にかかって……
生きてる今が未だ不思議」

ブラック「む。なんか人聞きが悪いわね……。そこらへんの詳細は
長編2を読んでもらうとして。

操る……っていうより『分心』は、精神を乗っ取るって感じだけ
ど。『分心』っていうのは恐らく、『状態変化属性』よ」

リチウム＆トラン＆ホワイト「状態変化？」

ブラック「そう。『状態変化』っていうのは、物質なんかの状態や
形状を変化させる魔力の属性の事。
で。『分心』の話に戻るけど。

あれは、分割した術者の精神の一欠けらを相手の頭の中に寄生さ
せて精神を乗っ取るって術なの。己の精神の形状(?)を変化させ
て行う行為。だから『傀儡属性』じゃなくて『状態変化属性』にな
ると思う」

リチウム「成る程」

トラン「……………難しいっつか、ややこしいな」

ブラック「『状態変化属性』には他にも、単純な所で『巨大化』や
ら『縮小』やら『コピー』やらがそうね。ちなみに色は橙系」

リチウム「『巨大化』ねえ……………いつぞやの事件を思い出すぜ……………」

ホワイト「あは、あはははは……………」

トラン「どしたの？ ホワイトちゃん。汗かいてるよ？」

ブラック「んで、次に。『具現化属性』」

トラン「具現化……ああ。それならなんとなく解る気がする」

リチウム「長編1で出てきた『花禁術』がそうだな」

ゴールド「確か、あの話で蜘蛛爺が出してた……『魔力の流れを吸い取る糸』なんてのもそうね……」

ブラック「『具現化属性』だけは、唯一色が定まっていらないのよね……いろんな色が混ざり合ってたんだとか」

トラン「……ん……。こうして思い返してみれば長編って、その都度別属性の敵が出てきてないか？」

ブラック「……言われてみれば。

長編1が、『具現化属性』の大蜘蛛。

長編2が、『状態変化属性』の狼人。

んで、長編3が……『傀儡属性』……か」

リチウム「それってなんか意味があんのか？」

ゴールド「作者の事だから。「たまたま」って答えが返ってきてそーじゃない？」

トラン「……だな」

ホワイト「この流れで行くと、長編4の敵さんはあ……長編1～3で出てきた敵さんの属性以外の属性って事になったり……」

ゴールド『作者の事だから、以下同文』

リチウム「……………だよなあ……………」

ブラック「で、最後の属性だけど……………。『^{エレメンタル}精霊属性』同様、これもまだ長編では一度も敵として登場してくれてないわね……………。『無効化属性』ってやつなんだけど」

リチウム＆トラン＆ホワイト『「無効化属性」？』

ブラック「そう。他の魔力干渉を一切受け付けませんって魔力よ。対魔力は術者の魔力量に比例するそうだから、持ち主の魔力量が多ければ多い程、最強化^{むてき}する事になるわね。

色は透明や白がかった半透明。『無効化属性』の石には結構有名なところが多いわよ。

例えば……………短編集で出てきた『クリア』もそうだし、『バリア』『シールド』もそう」

リチウム「『バリア』なんかはもうおなじみだな。当然、このマンションにも設置してある」

トラン「しかし、無敵、か……………。相手が魔力放出量の極めて少ない人間ならともかく、この属性の魔族や天使が敵として現れたら……………苦戦強いられそうだな……………」

ゴールド『「無効化属性」の奴になら、トランちゃんは本編中に一度、鉢合わせしそーになった事あるわよ？』

ゴールドを覗く全員『マジで！？』

リチウム「トラン！ おまえ……なんでニアミス……！？ なんて殺^ヤられてないんだ！？」

トラン「って、縁起でも無い事ぬかすな！」

ゴールド『リチウムの始末は後でつけるとして……』

尤も……ソイツが今後、アタシタチの敵として現れるかどうかは……定かじゃないケド』

まとめ！

トラン「属性はこれで全部？」

ブラック「ええ。

エレメンタル

『精霊』

『傀儡』

『無効化』

『状態変化』

『空間操作』

『具現化』……この六つ。

さらに。この六属性の内、五属性はそれぞれ三つの巨石に直結した力って言われてるわ」

リチウム「三つの巨石って言う……アレだな。人界、天界、魔界の三空間にそれぞれ在ると言われる世界の創造主^{フロース カミサマ}ってヤツ」

ブラック「そ。『傀儡』は天界の巨石。

『無効化』と『状態変化』は、人界の巨石。

『空間操作』と『具現化』は魔界の巨石……ってな具合。
残りの属性『^{エレメンタル}精霊』は、巨石には属さない魔力みたい」

ゴールド『へえ。そこまで解ってんの……』

ブラック「このくらい、ストーンハンターにとっては常識中の常識
って程度なだけだね。

……例外も、一人居るみたいだけど。……はあ」

……おや？

リチウム「……………なあ。聞いていいか？」

ブラック「なによ」

リチウム「こうして並べてみるとさあー。なんか、なあ……………」

ゴールド『だからナニ。歯切れ悪いわね』

リチウム「んー。

俺様の……『死球』はさ？ 一体どの属性になるのかな？ つつ疑問が自然、湧いてくるんだが」

ホワイト「……リチウムさんの死球の色って……黒、ですよね……………」

トラン「言われてみれば……無いな。黒色の属性なんて」

リチウム「だろ？ 俺様はこれまで、持ち前のスンバらしい推理力でもって『空間操作』じゃないかとみていたんだが……こつも色系統が細かく定まってンのを目にしてつと、なあ……」

トラン「色でいくと……特に定まっていな『具現化属性』なんだろうけど……。……なんかピンとこないよな」

ブラック「あたしも前々から疑問ではあつただけど……。ま。世の中何事も例外はあるし。他にも、おんなじような色してんのに別属性の石つてのも無い訳じゃないしね。四大元素の『大気』から発生した『雷』の石だつて、傀儡でもないのに黄色系だし」

トラン「なんか……意外と細かい事気にしないのな。リタルもそうだけど……そういうトコなんか……リチウムの奴とすごい似てる……」

リチウム＆ブラック『そう（か）？』

トラン「……は！

……ひょっとしてここまで俺達に付きまとうブラックの正体って……！」

ブラック「な、なによ……！」

ゴールド『トランちゃん？ ようやく気づいたの？』

トラン「ああ！ その背格好！ その性格……上から目線の偉そうな物言い！」

ブラック「ぎくぎく！」

ホワイト「さすがですトランさん。伊達に刑事じゃないです」

トラン「んっふっふ。

……ブラック！ キミの正体は………リチウムの『妹』だ！」

ゴールド＆ホワイト『がく！』

リチウム「はあ？ 何言つてんだ阿呆刑事。俺様は一人っ子だぜ？
ンな訳が……」

ブラック「そおおんな訳ないでしょおおが！！

一体どこ見て何馬鹿さらしてんのよあんだ！ 本物の馬鹿！？
ねえそうなの！？ 目えまで馬鹿つてンのあんだあ！」

トラン「な、何急にキレて………って、うわ………、や、やめ………
うっぎゃああああああ！！」

ゴールド『トランちゃん！！ ダイジョブ！？』

ホワイト「うわぁ………あちこちに即席巨大青タンです」

リチウム「………って、………だな……。なあに過剰に反応してん
すか………？ ……ブラックさん………？」

ブラック「っさいわねリチウム！ あんたみたいな男と兄妹なん
かにされてたまるもんですかっつてんの！」

リチウム「………ここまで女の子に嫌われたの初めてかも俺様………
……」

ブラック「んな事でいちいちしょげないの!!」

ホワイト「って、兄妹……? ……なんだ、そうだったんですかぁ」

ブラック「ホワイト! あんたも何ホツとしてんのよ! 大体反応遅すぎるわよ!」

ゴールド『アタシのトランちゃんに手をあげるだなんて、いきなり何ブチきてんだか……』

……… ひょつとして。照れてんの? アンタ』

ブラック「ち、違うわよ。あたしはただリチウムなんかと兄妹にされると……っ」

ホワイト『へへエ? 兄妹にされると? なにか、ヒツジョーに困る理由でもあるつつうの?』

ブラック「べ、別にそんなんじゃない……!」

ゴールド『そんなってドンナ』

ブラック「ぐ……っ」

リチウム「何。遠慮してたのか? なんだ。俺様は別に構わんぞ? リタルのようなかわいげの欠片もない屁理屈幼児なんかより、そちのブラックの方が断然妹属性ではないか」

ホワイト「イモウトゾクセイ?」

ブラック「ああんたねええええ!!」

リチウム「……………って。なんだ？　なにやら、急に猛烈な殺気が……………」

ブラック「かわいげの欠片も無い屁理屈幼児で悪かったわねええええええええ!!!!」

リチウム「うっぎゃああああああああ!!」

しめっ

ホワイト「……………リチウムさんにもトランさんとおそろいの青タンができてます……………あ、でも、リチウムさんの青タンの方がトランさんの三倍は立派ですね」

ゴールド「ホント。完全に白目ムイてる……………って、ダメよグレープ、そんな突いちや。移るデシヨ」

ブラック「ふん！　天罰よ、テンバツ！　アイドル天使、天才リタルちゃんの心をギッタンギッタンに踏み躪ってくれた報いよ！」

ゴールド「てか、ブラックー。幾らアタシたち「美少女置き人」って肩書きしてても、そんな人相変わる程鼻息荒くしてる場合じゃないっシヨ」

ブラック「誰の鼻息が荒いつて!?　大体誰のせいだと思ってるの!!」

ゴールド『……だから。いーの？ さっきの「『死球』は例外」って発言。曲がりなりにも「魔石講座」なんてタイトルしてんのになアバウトでさ？。……アンタ。そのうち作者みたく「いゝ加減」が代名詞になっちゃうわヨ？』

ブラック「……う。それはとことん嫌過ぎだけど……んゝ……、ンじゃあ……『死球』は無を操る魔石だから……、
『無属性』ってことで！」

ゴールド『それこそイーカゲンゝ』

ブラック「もゝ、なんでもいいわよ！ とにかくあたし、もう完っ壁にヤル気殺げたから。今夜の仕事まで寝倒してやるんだから！
ゝんじゃあね二人とも！ 後よろしく！」

ゴールド『アララ。ブラックちゃん、小さな背中が異様にサビしゲ。……全くあーんな解りやすい性格してんのに。なんで気づかないかなア。リチウムも罪な男よねエ……』

ホワイト「？」

ゴールド『アンタは気にしなくてもいーの。おとなしくリチウムの青タンでもつつついてなさい』

ホワイト「えゝ。いいんですかあ？」

ゴールド『そんなコトでいちいち嬉しそうな顔してんじやないの。それじゃ。なんつか強引な幕引きだけど。これにて「CC団のラブリー魔石講座そのいち」は終了よ。

一体どこいらへんがどう「ラブリー」だったのかって下らない質問は悪いけど却下。

ブラックのゴキゲンが直ったら「それに」で会いまシヨ、ボーヤ」

ホワイト「ゴールドさん。青タンって……よく見たら、なんだかともかわいらしいですね〜……」

ゴールド「……」。

……アタシ。アンタの好みが一番理解不能だわ……」

続……？

8・my little lady

あの、聞いていた歳よりもやけに幼く映る女の子と出会ったのは五年前。

持ち物は、緑色の巾着袋ただ一つ。

腰まで伸びた長い髪は艶やかで、ちまちまとした身体にふわりとかがっている。

小さなパーツの中でくりくりとした瞳の大きさが余計に際立つ。

愛らしい造りの顔は　しかしいつも仏頂面。

いくら呼んでも……口を開こうとしなかった。

「おら、ちびっこ。食べ」

「……………」

大きな瞳が睨むように俺の顔を見上げると
しばらくして出されたものに視線を落とし、素直に食べ始める。

「……………」

うんともすんとも言わない。

まあ、これでもよくなった方だ。

はじめは……それこそ目を合わそうとすらしなかった。

それに比べて今では、返事の代わりに、その垂れ目がちの大きな瞳が……そこに友好的な光が在るとはとも言えないが……俺を見上げる。

……まあ。それも仕方のない事だろう。

新たに生活を始めた先は、以前に女の子が住んでいたという立派な家ではなく、小さなボロアパートの一室。決して片付いてはいえない部屋で、しかも見知らぬ男と二人だけだ。

半年程過ごしたという孤児院からコイツを連れ出したのは、つい数日前の話。

このガキンチョにしてみれば……突然現れてここまで連れてきた初対面の俺は訳のわからん怪しい野郎なのだろう。

もしかしたら……いや、十中八九。俺はコイツに嫌われている。自信すらある。

ガキの扱い方なんざ知らないからな。目つきも悪いし。当然といえば、当然の事なのかもしれない。

カチャカチャと食器の重なる音が響く。

本当におまえは人間なのか、人形なんかじゃないのか……そう疑いたくなる程に小さな手で不器用にスプーンを操り、ようやく皿の上の料理をぺろりと平らげた女の子は椅子からぴょんと飛び降りた。

たどたどしい足取りで台所に消えてゆく。恐らく食器を洗うつもりなのだろう。……椅子を引きずる音と、やがて流水の音が続く。

しばらくして盛大な破壊音が耳を劈いた。

引き取ってから……毎夜毎夜続く光景だ。

多分、ここから見ている俺の気配にも気づいていない。

六歳のガキンチョが泣きもせず。ただ賢明に。

割れた皿の欠片を一つ一つ拾っている小さな背中が……なんだかとても痛そうだった。

シンクを打つ流水の音。

その下で、せつせと動く小さな肩が一つ。

狭いはずの台所が、何故か随分と広く感じた。

あんな風になる　それだけの事があつたのだ。

あの女の子はもう喋らないんじゃないかって。引き取る事を決めた日、孤児院のシスター達はそんな事を漏らしていた。

数日をとにも過ごしてみても、その言葉どおり彼女はただの一言も口にしなかった。

まあ、それならそれでいい。

後ろから小さな頭をわしわしと撫でてやると、女の子は驚いたように大きく瞳を見開いて俺を振り返ったが

やっぱりそれだけだった。

一瞬後にはいつもの仏頂面に戻って、無言で皿の欠片集めを再開していた。

そうなら、そうでいい。

無理せずとも。そのままでもいいと思う。

いいのだが……。

……脳裏に掠れた”彼女”の笑い顔が浮かぶ。

”彼女”は笑い上戸というやつだった。

あんな風に、見ているこっちにも笑いが感染する程に。いつか、このガキンチョも笑っていたんだろうか。

そう考えると……正直少しだけ、そんな顔も見てみたいかもしれないとも思った。

だが、それが叶うのは、ずっとずっと遠い先の話だろうとも、思っていた。

その時は確かに。

その女の子を……女の子が持つ強さを、俺は侮っていた。

明け方、再開したストーンハントから帰ってくると、廊下の弱々しい照明の下、淡いエメラルドのパジャマに身をつつんだ女の子が玄關の前の壁に背を預けて立っていた。

俺がドアを開けても、見向きもしない。ずっと俯いたままだ。ずっと、起きていたんだろうか。

いや。もしかしたら引き取ったその日から……、否。

あの悪夢の晩から眠っていなかったかもしれない。

「どーしたちびっこ。随分早起きだな」
「……………」

仏頂面に変わりがない事を横目で確認して、そのまま浴室に足を進める。とりあえず汗を流したかった。

……………」

くんと、僅かに後ろに引っ張られる感触。

「……………あ？」

振り返ると、ジーンズを女の子が握っていた。
見上げる大きな瞳は、いつになく強く、

「……………」

女の子はジーンズを握ったまま歩き出した。

「……………って、ちょっ、おま、何……………」
「……………」

問答無用。と、その背中が語っている。

「……………」

女の子が、ここまで意思を示すのは初めてだった。

っていうか、この数日間うんともすんとも言わなかったガキンチヨだ。

予想外の展開に半ば呆気にとられながらも、引つ張られるままに俺は足を進める。

進むにつれて異臭が鼻をつくようになった。

「……………なんだ、この臭い」

果たして、女の子が連れてきたのは悪臭際立つ……………台所だった。けたたましく働く換気扇。

いつも以上に散らかった流し台には、湯気の立つ……………スクランブルエッグ、らしきものが鎮座している。

というのも、このスクランブルエッグ。黄色の箇所よりも、真っ黒な部分が多い……………というか、大半をしめているのだ。

立派に焦げている。

横に、原型を留めていない卵の殻だの中身だのが散乱していなければそれが”エッグ”なのか判別がつかない程の珍物体だった。

「……………」

ようやく俺のジーンズを解放した女の子。その大きな双眼が急にすよつに俺を見ている。

「……………あの、な」

「……………」

「……おまえ、が、作ったんだよ、な？ この物体は」
「……………」

俺が引き攣った顔を向けると、途端に女の子はばつが悪そうに俯いた。

「……………」

改めて、皿の上の黒いほかほか珍物体に視線を移す。

……なんだろう。

どこか、奇妙に思った。

……いや、それを言うなら目の前のこの物体をおいて奇妙万歳！なものも無いのだが、それとは別に。

こんなものをこんなちゃんまいガキンチョが一人で作ろうとしたなんて……いや、作り方を（一応）知っていた事にも驚いたが。

……俺に、作った……んだよな。

……なんでだ？

確かに晩飯の後で、今日から毎夜『仕事に行く』事は伝えてあったのだが……。

「……………」

こんなもん作って。

俺の帰りを待ってたのか？

嫌いな野郎の帰りを？

ふと、視線を感じて振り向けば、女の子がじつと……窺うように俺を見ていた。

その目はただ一心に、無言で突っ立ったままの俺を責め続けている。

「……………っ わあっ たわあっ た、食えっ てんだろ……………」

皿に向き直り、黒い物体（比較的マシだと思われる部分）を一撮
み口の中に放り込む。

……………。

…………… どもこうも。

味なんかしないではないか。

「…………… おい、ちびっこ。これ……………」

思わずジト目で女の子を睨むと、

「…………… やない……………」

聞こえてきた小さな音に 吃驚して目を引ん剥く。

「…………… あ？」

随分間の抜けた声をあげてしまった。

「…………… っ」

女の子は大きな瞳をさらに大きく見開いた。
睨むように、

「くちびっこじゃない…………… っ」

…………… どこか、縊るように。

「…………おまえ」

初めて耳にした、搾り出すような声は

「…………リタル…………」

決して、”彼女”の声には似つかわない。
だが、どこか面影の残るその顔が、
精一杯の眼差しが

「リタルって、言うの…………っ」

…………気がつけばいつの間にか、大きな目に大粒の涙が溜まっていた。
た。

それでも女の子は零そうとしない。
乱暴にぐいぐいとこすって、なおも俺を見上げる。

…………そうだ。

喋らない。

笑わない。

…………でも。

「……………」

この散らかった台所。
味の無いスクランブルエッグ。
小さな小さな訴え。

いつもの仏頂面。

俺を見上げる強い視線ですら。

その存在、ひとつひとつが皆、女の子の精一杯の勇氣、そのものだ。だった。

「……………」

僅かに震える体。真っ赤な半べそ面。

コイツは、こんなに精一杯。現状を把握して、自分なりに対処しようとしていた。

コイツなりに。懸命に。

自分の居場所。自分の位置というものを見つけようとしていたんだ。

「……………ったく」

思わず盛大に溜息を吐くと、

ビクッと女の子の肩が震えた。

今、ようやくわかった。

この女の子は、ガキンチョなくせして他人に甘える事をしない…
…甘えたがらない、相当な意地っ張りだ。

……そうだ。なんてったって”彼女”譲りなのだから。

「……………」

「……………っ」

それは……理解したんだが。

もう少し……ガキはガキらしくわかりやすい態度で挑んで欲しか

った。

よりもよってそういう変な箇所を。……コイツは”彼女”から
しっかりと受け継いだようだった。

「……くっ」

苦笑して、未だ訳も解らずにふるふると震えるその小さな頭に、
黒い物体の乗った皿を乗つける。
と、ようやく女の子の陰がとれた。

「……あんな」

「………？」

頭の上の皿を両手で支え、キョトンと見上げる小さな顔を覗き込
んで言ってる。

「もうちつとマトモなモン作れるようになったら名前で呼んでやら
あ。ちびっこ」

ピシッと何かが固まったような音が響いた台所を俺は上機嫌で後
にした。

浴室に入ると、またもやガッシャンという盛大な音が響いてくる。
もしかしたら、それはわざとだったのかもしれない

「……ンだよ。おまえ、まだ続けてンのか。それ」

深夜。仕事に出る数十分前。

眠気覚ましにシャワーでも浴びるか、と足を進めた廊下で、ふい

に物音が聞こえてそちらを振り返る。

キッチンで冷蔵庫の前に仁王立ちして牛乳を飲んでいた小さな女の子と目があつた。

ちなみに彼女はすでに出る準備万端のようだった。

「あつたり前でしょ。これ、あたしの日課。ノルマ。あんたが毎晩欠かさず泥棒に入るのと同じ」

「……泥棒、ねえ」

……泥棒がノルマなら、俺がおまえを拾ったのもノルマの内って事になるんだが。いいんだろうか。

いつものようにからかおうかとも思ったが、それを口にしたが最後、烈火の如く怒った上に仕事せずと根に持たれそうだったので、代わりのネタでつつつく事にした。

「べつつにいいんじゃないか、ちびっこでも。つか、ちびっこはちびっこなりにいい事あんだろ。乗り物代が幼児料金でタダになるとか」

「『ちびっこ』連発しない、幼児言っなっ！

……そう思っんならあんた、身長分けてよ。無駄にデカいんだから」

プーっ頬を膨らます所はまだまだ幼い。

小さな顔に、垂れ目がちの大きなエメラルドの瞳。

黄緑色の髪は二つに分けて結い上げている。

身長は……あの頃と比べれば伸びてはいるが、未だ百三十一センチ。

そんな彼女はついこのあいだ十一歳になったばかりだ。

五年前のあの無口な女の子の正体は……「意地っ張り」が服着て

歩いてる。本当に、ただそれだけだった。

女の子の声を始めて耳にしたあの日。ガシヨンと皿の割れた音がしてその後。

それまでの無口っぷりが嘘のように、シャワー浴びて寝て、起きた翌方方にはもうべらべらと文句をぶーたれていた。

やれ「おまえのほうがまずい」だの。やれ「りょうりおしろ」だの。やれ「じぶんもつれてけ」だの。

ちなみに女の子曰く、孤児院ではネコをかぶっていたらしい。

……さて。果たしてどこまで本当なんだかしらねえが。

ちなみにその後、女の子は十数日の間にスクランブルエッグを完璧にマスターしてみせた。

卵の割り方から、味付け、火の通し加減まで。

思わず唸ってしまった俺に「ふふん」と得意げに鼻を鳴らした六歳の女の子は早速名前呼びを求めた。「ちびっこ」がどうしてもお気に召さないらしい。

意地っ張りな上、努力家で、それでいて恐ろしい程器用な彼女は俺がつっつけばつっくほど怒りをエネルギーに変換して何でも完璧にこなすまでに修得してしまう。それが面白くもあつたが、……正直やりすぎた感も否めない。

今の彼女を見ていると、特にそう思う。

「……………なによ?」

腰に手を当てコップに残った牛乳を一気に飲み干した女の子は、俺を振り返った。

口の周りに牛乳で出来た白い髭が生えている。

「……………なんでも。それよかりタル」

「何?」

見上げるエメラルドグリーンを覗き込む。

「ンな急いで成長すんなよ。

焦らなくてもどうせおまえ、将来美人だぜ」

「は？　ゝあ、あんた……い、一体何を………！？」

「別に？　白い髭なんてこさえてるからさ」

ピシッと何かが固まったような音が響いた台所を俺は鼻歌交じりに後にした。

……「そっぴや俺、こんな風によく”彼女”をからかってたっけなあ。

浴室に入ると、ガッシャンという音が響いてくる。

もしかしたら、それはわざと……だったのか、そうでなかったか。

9・乾クエキヤラによる後書き

リタル 「さてさて。今回は初の短編集でしたけどいかがだったでしょうか？」

グレープ 「お楽しみいただけましたらとっても嬉しいです」

クレープ 「……ん？ あれ！？ もうオワリなの！？」

トラン 「どうした？ クレープ」

クレープ 「うそデシヨ！ 無いじゃないのお……！ 無い無いないナイ?!」

リチウム 「……いきなりなんだクレープうるっせえなあ。オチオチ寝てらんねえじゃねえかよ……。……おまえの大く切なトランプロマイド集なんざ誰も盗むヤツあいねえぞ？」

トラン 「くそ、そんなん撮ってたのか！？ ……いつのまに……っ」

クレープ 「違っわよ！ ソレは永久保存版だから嚴重に「秘密のクレープちゃん金庫」に保管してあるわよっ じゃなくてエ……見ればわかるデシヨ！ アタシメインの話が一話も無いじゃないの?!」

リチウム 「……はあ？」

リタル 「言われてみれば……確かに」

クレープ『ナンテコト！ アタシとトランちゃん主演の才耽美な恋愛模様を深く描く大人のラブストーリーをいまかいまかと待ってたというのに……っ』

チビガキ、グレープ、トランちゃんとはともかく、影薄リチウム主演の話まであったってのにアタシの話だけが無いなんて……そんなのアリっ？！』

トラン「……才耽美って」

リタル「ちびがきって言うなあー！」

リチウム「あれは俺様主役つつうより……メインはリタルじゃね？俺様だって不満満タンだぞ！」

トラン「そういえば。今回は何気にリタルメインの話が多かったような……」

クレープ『このセクシー美少女クレープちゃんを差し置いてボケボケグレープや幼児体型リタルをメインに持つてくるなんて……一体これはどういう仕打ち！？ アタシの美貌を妬んでの誰かの策略！？ とりあえず作者ああ！ 出てきなさい！！』

リタル「幼児体型言うな！！ アタシだって成長すればあんたなんてメじゃないってーの！」

クレープ『バアカ言ってンじゃないわよ！ 幼児体型は成長したって幼児体型のマンマに決まってンじゃないの！』

リタル「なんですってえ……………！！！」

トラン 「まあまあ。二人とも抑えて抑えて」

リチウム 「確かにクレープの言う事も一理あるわな。今回は初の試み、短編集だというのにホームページに載せていたSSをリメイクしたものが多数並べてあるだけでオリジナルが少ない。で、当然俺様のメインも少ない、と」

クレープ 『一人称が一話でもあるだけマシよ！ その程度で不幸を語ろうなんて片腹痛いわリチウム！』

リタル 「別にいいじゃないの。あんたたちが出てない分しっかりあたしが盛り上げてあげたんだから」

クレープ 『全っ然盛り上がってない！』

リチウム 「消化不良って感じが否めんな」

リタル 「なんですつてえ……！」

トラン 「確かに。あんまり弾けた記憶が無いような」

リタル 「う……」。

……ま、まあ。よくよく考えてみれば？ 始まる前は『思っ存分はっちゃけちゃってください！』とか聞いてたのに……いざ振り返ってみると確かに。暴れた覚えが無いわね……話数も少ないし……」

グレープ 「ええとですね。それに関してはなんでも、理由があるそうです」

クレープ『理由?』

グレイプ「はい。作者さん曰く、のっぴきならない理由だとか」

トラン「それってどんな……?」

グレイプ「時間がないそうです」

一同『はあああああ?!』

グレイプ「短編集を初めて一ヶ月位経った頃……でしょうか。

ホームページに新企画が持ち上がったらしくって、作者さん、少し前からそちらの方にかかりつきりになってるそうなんです。

勿論、短編集が始まったばかりなのに……って心配された方もいらっしまったそうなんです、作者さん『乾クエキヤラは遅しいから、放っておいても大丈夫』、だそうで……」

一同『くっついておい!!』

グレイプ「で、長編4の方もしばらく連載出来ないとの事でして……」

一同『なんだそりゃあ!!?!?』

グレイプ「乾クエシリーズの短編はひとまず打ち切り。長編の続きは、新企画の進行にある程度のメドがついてから……と」

一同『なあんだってええええええ!!?』

リチウム「くおのくれく作者！　よくもこの俺様をここまで蔑ろに……っ　命は惜しくないを見た……っ（死球発動）」

クレープ『こんなの横暴よ横暴！！　長編4だつてアタシがメインの話だつてんで毎日サロン通つてスタンバつてたのに！

アタシとトランちゃん主演のラブラブ新婚物語を返せー！！』

リタル「……ぬっふっふっふ……ふっふっふのふー」

トラン「な、なんだよりタル……その恐ろしい程邪悪な笑顔は……っ」

グレープ「リタルさんが般若のようです、恐いです」

リタル「ふっふっふ……せいぜいほざいてなさいな負け犬さん方」

クレープ『つてアンタねえっ　誰が負け犬よ誰が！！』

リチウム「まさかリタル……策でもあるつてのか！？」

リタル「当然。あたしを誰だと思つてるの？　くこれをゴランナサイー！！」

トラン「そ、それは……っ！？」

クレープ『短編集第二弾の脚本じゃない！？　あんた……一体どうやって……！？』

リタル「ふん！　天才リタルちゃんに不可能という文字はないわ」

グレープ「……あれ？ あれ？ 作者さんから預かった脚本が……」

トラン「……持ってたの、グレープちゃんだったのね……。納得。……っかし。そんなものが存在しているとは……。まだこんなへっぽこ短編集を続ける気があったんだな……。作者」

リチウム「さすがは俺様が相棒と認めただけの事はある！ さ、リタル！ それを今すぐこっちに寄こすんだ！」

リタル「いやよ」

リチウム「なに……っ」

クレープ「………アンタまさかつ」

リタル「そのまさかでしょ」。

ってな訳で、この次の短編集もあたしが乗っ取ったわ！！ これで次の主役の座もあたしのもの〜！

リチウム「って、こらまでリタル！ そんなの真の主役である俺様が許す訳がなかるうが！！」

クレープ「ちょっと待ちなさいクソガキ！！ 今度こそ昼メロ級にねっとりしたトランちゃんとの熱いラブロマンスをやるんだから……！！」

グレープ「………いっちゃいましたね……みなさん」

トラン「でも……グレープちゃん、大丈夫なのかい？ 後で作者

に責められたりとか……」

グレープ「え？ どうしてですか？（きよとん）」

トラン「くか、かわいい……！ そ、そうだよなっ 作者だって（超^{スパー}かわいい）グレープちゃんを責められる訳がないよな！」

クレープ「ちょっとトランちゃん！ 何グレープ相手にデレデレしてんのよー！！」

トラン「うわわクレープ！ いつのまにー！！」

クレープ「って、待ちなさーいトランちゃん！！ オシオキしてやるうー！！」

グレープ「……」。

……え、ええと。一体どうすれば……、……あ。

……そ、それでは改めまして。

短編集第1弾はこれで終わりです。

みなさんお楽しみいただけましたでしょうか？

これにて乾クエシリーズは一旦オヤスミに入りますが、作者さんも最終話までの構想は練られているようですし。それに……」

リチウム「ぬおおお！ 俺様はまだまだ出足りん！ 断じてこのままで終わらせてなるものかあー！！」

トラン「そんな俺だって同じだい！ 長編では色々と腑に落ちない事が山ほどあるってのに、このまま待ってろ、だなんてあんまりだー！」

リタル 「そんなの全員同じよ！！　ここまで蔑ろにされて黙って泣き寝入りだなんて死んでもごめんだわ！」

クレープ 『ったりまえデショ！！　こうなったらこのまま作者の家に押しかけて脅迫でも放火でも爆破でも、書くって言っただけなんだってやってやるわよ！！　くいくわよミンナ！！』

一同 『おー！！』

グレイプ 「……みなさんのあの様子ですし。なにやら復活も近そうですね、続きを待つてくださる優しい方はわたしとお茶でも飲みながら気長に待っていていましょう、です。

それでは。少しだけサヨナラですね。

またお会いしましょー（掌ひらひら）」

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0755n/>

乾坤一擲探求者（クエスター）[赤信号！ 皆で渡れば……やっぱ怖い！]改

2010年10月9日04時55分発行